

スルニ方リ拔牙ヲナシテ新創面ヲ作ルハ感染ノ期會ヲ増ス者ナリ故ニ急性炎症及化膿ノ存在シタルキハ數日間待期療法或ハ消炎療法ヲ施シテ炎機ノ少シク鎮靜シ化膿ノ限局スルヲ待チ然ル後拔牙ヲナスヲヨロシトス

五、妊娠ハ又婦人ヲ一般ニ衰弱セシメ神經機過敏トナレルヲ以テ拔牙ニヨリ諸種ノ偶發症ヲ誘起シ易シ腦貧血震盪等モ頗ル稀ナラズ故ニ寧ロ藥効的處置ヲ施スヲヨシトス授乳期及月經期亦然リ

第三章 器械及ヒ其使用法

拔牙器中最古クヨリ使用セラレタルハ鉗子ナリデルフォスノアポロ宮ニハ紀元前三世紀ニ使用セラレタル鉛製拔牙鉗子ヲ藏スト云フ以テ其ノ遠キ歴史ヲ有スルヲ見ルベシ「ペリカン」Pelicanハ鈎端ト鋸齒端トノ間ニ齒牙ヲ鈎取シテ拔去スルニ使用セラレ鍵子 Keyハ以テ齒槽突起ヲ支點トシテ齒牙ヲ鈎取スルニ適シ螺旋 Screwハ以テ根管內ニ螺入シテ齒牙ヲ牽出スルニ用ヒラレタリト雖モ何レモ不便ニシテ組織ヲ毀損シ易ク忽チニシテ廢用セララル、ニ至レリ現今廣ク使用セララル、器械ニアリ鉗子及挺子トナス

一、拔牙鉗子 Extraction Forceps.

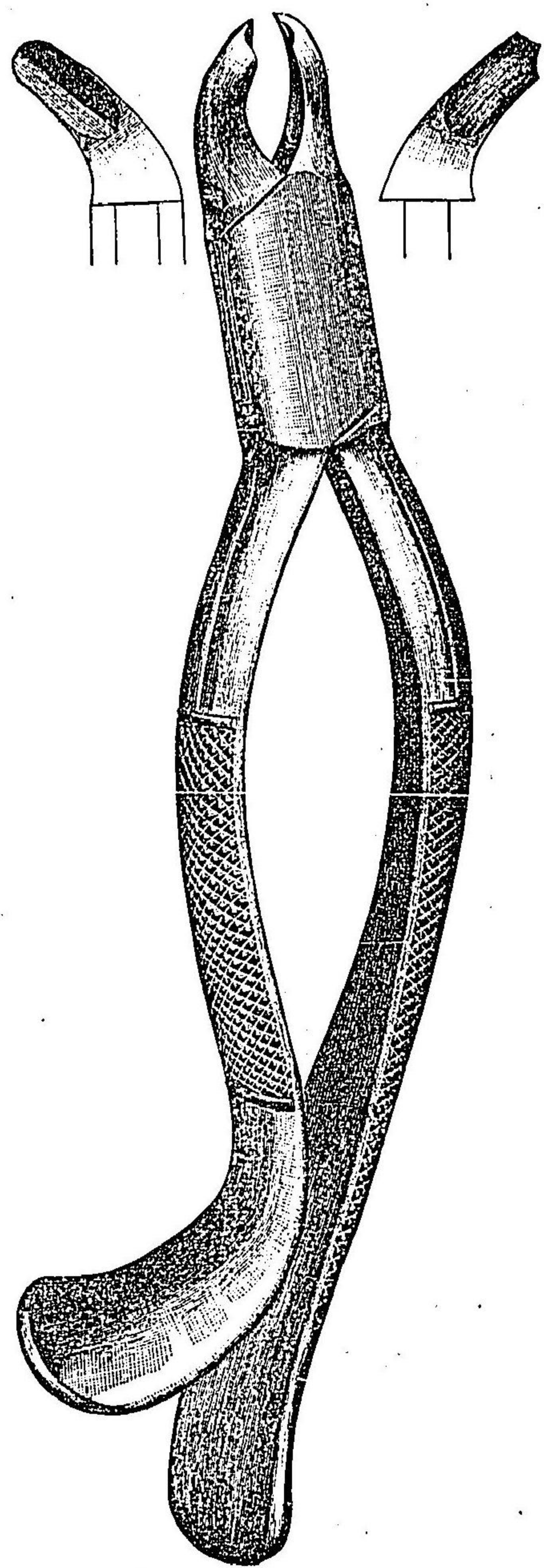
鉗子ハ古來使用セラレタルモノ、形態ヲ改良シタルノミニシテ原理ハ一ナリ第一種槓杆ノ原則ニヨリ齒牙ヲ鉗取シテ動搖弛緩シ齒槽窩ヨリ脫出セシムルニ用ユ破壊シテ脆弱鉗取シ難キ齒根ノ拔去等ヲ除キテハ常ニ有要ナル器械ナリ其重ナル形態ハ第百—百三圖ニ示ス

其他各人自カラ好ム處ニ應ジテ數個ヲ集メテ一組トナシ販賣セリト雖モ常ニ必ラズシモ便宜ナルモノト稱スベカラズ要ハ各人ノ嗜好ニアリ近來消毒ニ便ナラシメンガタメニ關節ニ於テ分離スル様調製セラレタルモノアリ

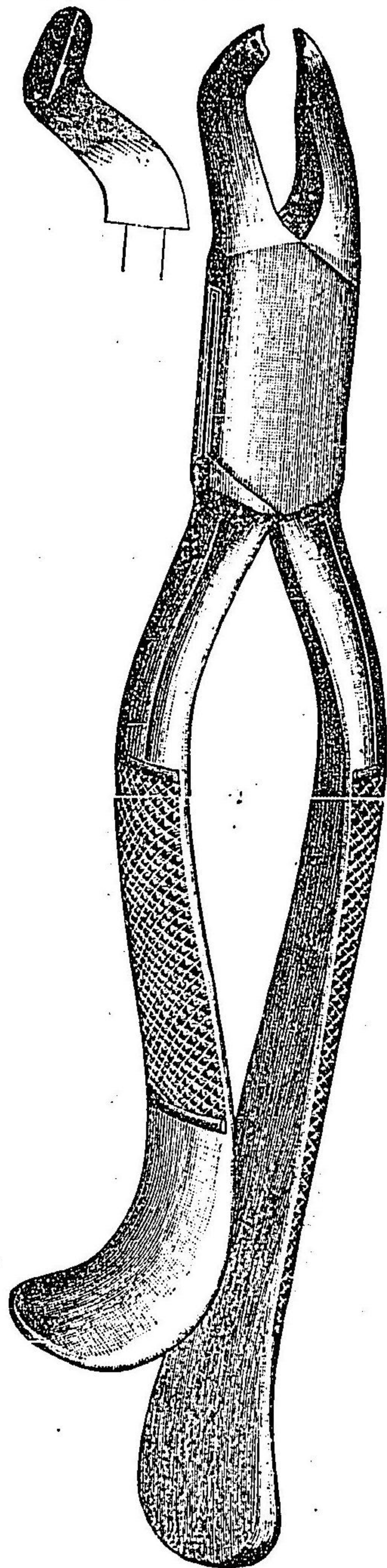
鉗子ノ把握法 人ニヨリ頗ル之レヲ異ニスト雖モ最平易ナルハ先ヅ鉗子ノ兩柄ヲ手掌ニ上セテ拇指頭ヲ以テ兩柄交叉點ノ下方即兩柄緣ノ相移行スル部ヲ輕ク壓へ齒牙ニ適合スルニ方リ兩嚙ヲ開閉スルニハ柄ノ末端ニ近ク小指ト食指トヲ入レテ柄ノ内側ヨリ押ユルヲ便トス拇指ハ此際常ニ其開閉ヲ調節スルモノタリ

鉗取ノ度ヲ確實ナラシムルハ一ニ手掌ノ把握力ニヨルモノニシテ之レヲ制御スルニハ拇指頭ヲ以テス殊ニ下顎用鉗子ノ屈曲セルモノヲ使用スルニ方リ

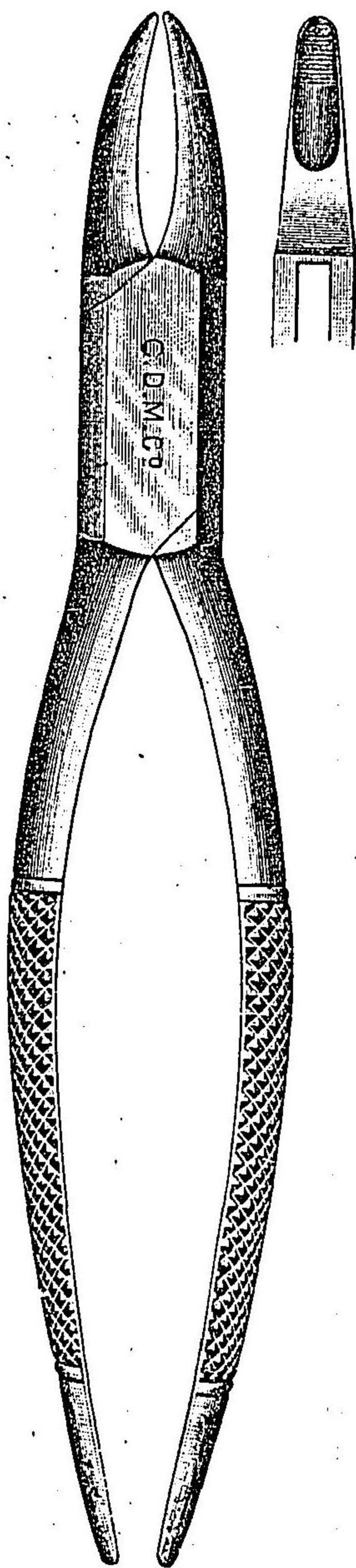
圖三百第
子鉗用齒白顎下



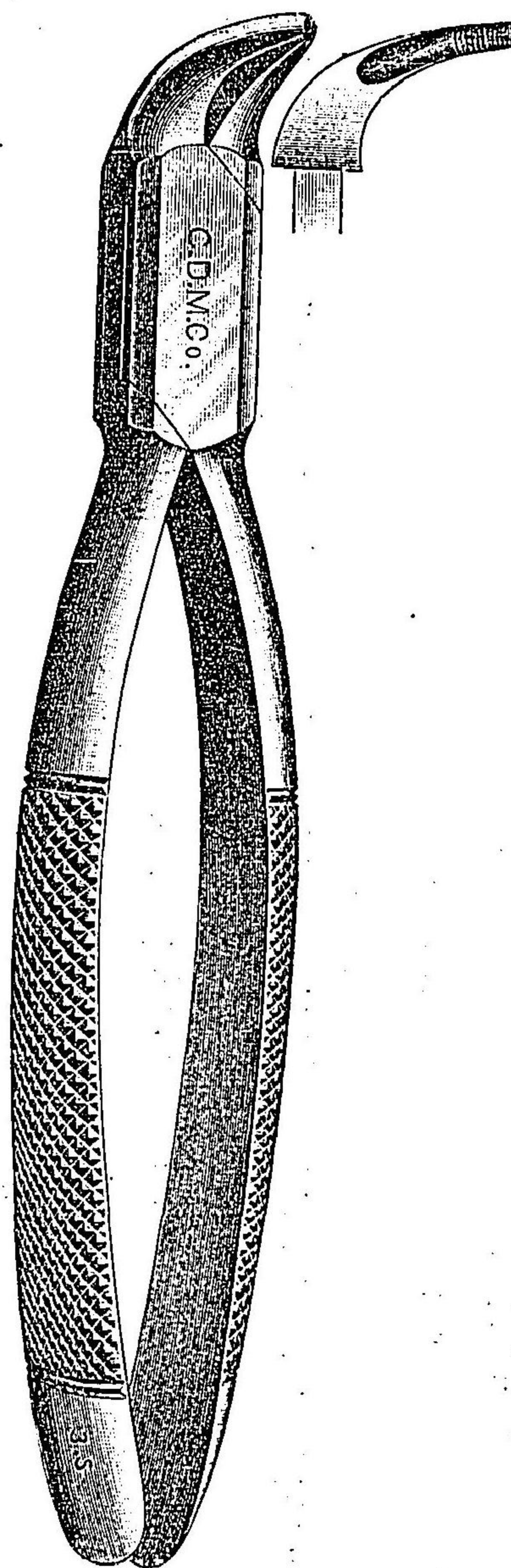
圖二百第
子鉗用齒白右上



圖一百第
子鉗用齒根單顎上



圖百第
子鉗用齒根單顎下



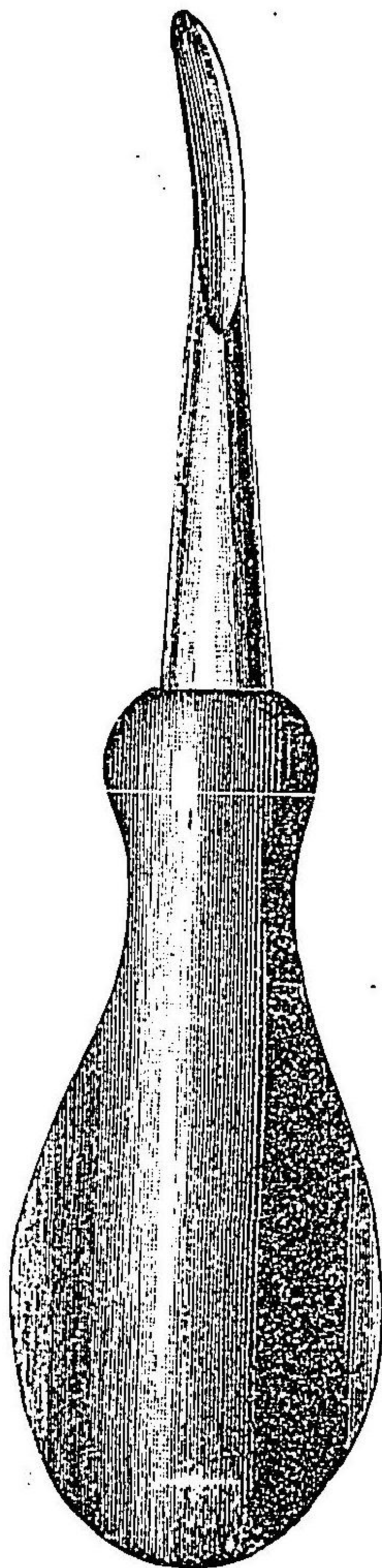
拔齒術

三百七十七

拔齒術

三百七十六

第四百圖



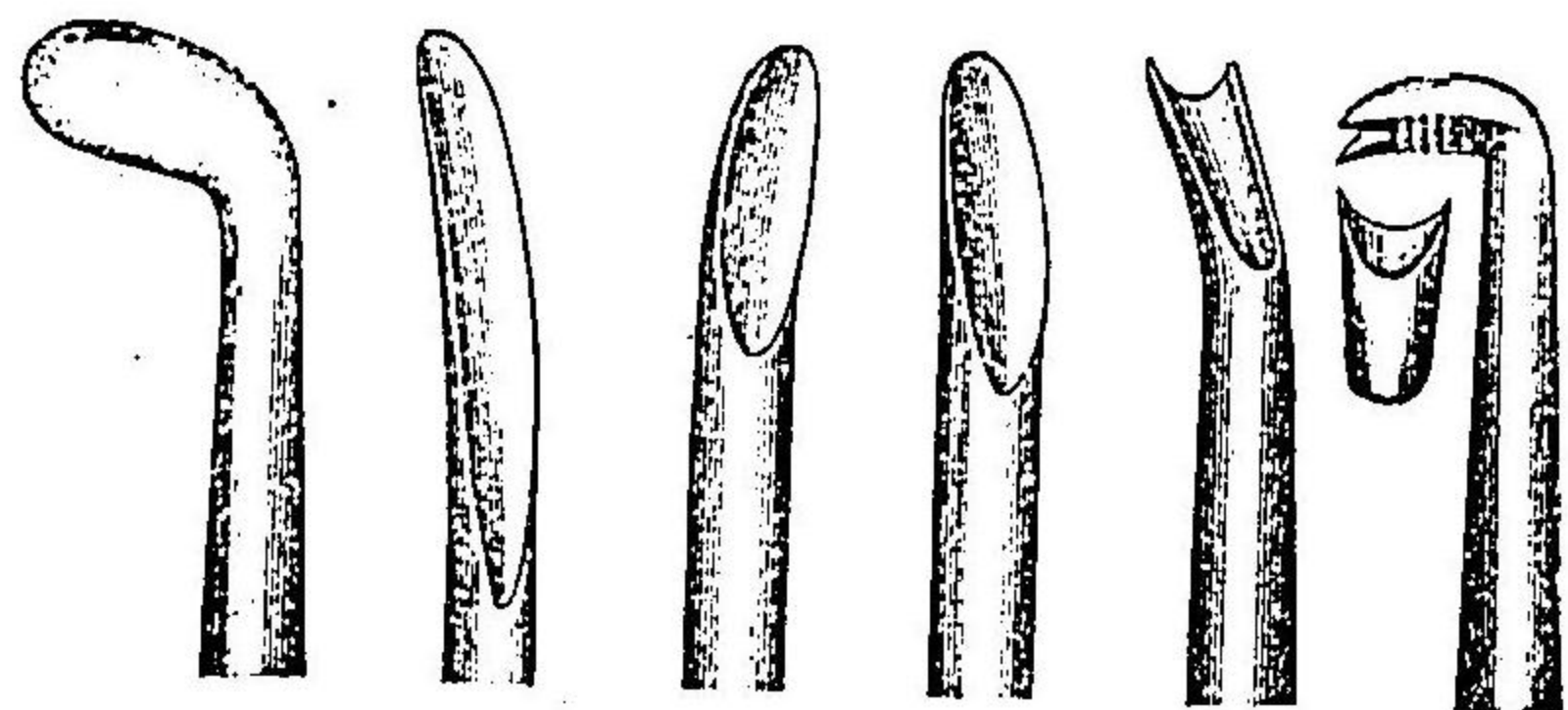
テハ拇指頭ハ之レヲ齒槽窩内ニ壓入スルノ要ヲ兼
ヌ

二、挺子 Elevator

挺子ハ十九世紀ノ初メ米國齒科醫學ノ幼稚ナリ
シ時代ヨリ廣ク使用セラレタル處ノ拔齒器械ニシ
テ現時ハ拔齒鉗子ノ改良ニ伴フテ少シク其聲價ヲ
落シタリト雖モ尙之レニ熟練セル人ノ手ニアリテ
ハ必要缺クベカラザル處ノモノタリ

楔ノ原理ニヨリテ齒根ノ一側ヨリ齒槽窩内ニ挿
入シ之レヲ挺起スルモノニシテ破壊折傷シテ鉗取

第五百圖



シ能ハザル齒根ヲ拔去スルニハ最便宜ナリ、或ハ拔齒ノ際齒冠ヲ破折シテ齒根
ノ堅ク齒槽突起内ニ篋入セルモノニ於テモ亦然リ、第四百及百五圖ハ其最便利
ナル形態ノモノヲ示ス使用法ハ齒根拔去ノ條下ニ審ナリ

第四章 術式

曾テ拔齒ハ路傍ニ於テ行ハレタルヲアリシガ現時ノ進歩セル齒科醫學ハ又
此ノ如キヲ許サズ嚴然タル消毒法ヲ行ヒタルノ後無痛のニ之レヲ施サザル
ベカラズ病的非病的細菌ノ十數種ハ常ニ健康人ノ口腔ニ存在スルヲ人ノ知ル
處ナリ、拔齒術ハ左ノ順序ニヨリテ之レヲ行フ

一、消毒 口腔ハ其機能上全然無菌ノ状態ニ保ツヲ難シト雖モ可及的之レヲ
清潔ナラシムルヲ要ス之レヲ施スニハ左ノ順序ヲ以テ輕易ナリトス

1、防腐消毒劑ヲ以テ強ク含嗽セシム、三布仙硼酸メソク水、一布仙石炭酸水、一
布仙バイロゾン其他敢テ強力ナルモノヲ要セズ只反覆注意シテ含嗽セシムレハ
足レリ

2、拔齒セントスル齒牙及ヒ其附近ノ齒牙ニ沈着セル齒石及有機質ヲ注意シ

テ除去ス

3. 洗滌用バイロゾンヲ以テ施術面及ヒ其附近ヲ洗滌ス、細菌及ヒ有機質ハ之レニヨリテ全ク清掃スルヲ得ベシ

然ルキハ施術面ハ清潔ニシテ感染ノ患ナキヲ得ベシ

二、麻酔 極メテ弛緩動搖セル齒牙或ハ強壯ナル人ニ施スニハ敢テ麻酔ノ必要ヲ感セザルコアリト雖モ通例之レヲ施スヲ安全トス、極メテ神經過敏ノモノ或ハ多數ノ齒牙ヲ一時ニ拔去セントスルキ或ハ極メテ困難ナル拔牙ヲナスニ方リテハ全身麻酔ヲ要スルコナキニアラズ、亞酸化窒素麻酔ハ米國ニ於テ稱用スルモノ多シト雖モ之レヲ適用スルニハ特別ノ裝置ヲ要シ麻酔性持續セズ敢テ特殊ノ効果ヲ認メズ、嘔囉仿謨ヲ以テ半麻酔ノ状態ニ於テ施術スルハ最普通且安全ニシテ長短隨意ノ麻酔ヲ得ベシ

局處麻酔ハ一般ニ適用セラル、處ニシテリゴリン、エチールクロロイド等ノ凍凝性藥劑ノ使用セラル、コアリト雖モ古加乙涅ノ注射ヲ以テ更ニ確實ナリトス、歐加乙涅亦使用セラル注射器ハ普通ノ一瓦入ノ皮下注射器ヲ以テ足レリトス

注射液ハ古加乙涅或ハ歐加乙涅ヲ以テ作ル左ニ安全有効ナルモノ二三ヲ示ス

- 一、鹽酸古加乙涅 一、〇 食鹽 〇、八 蒸餾水 一〇〇、〇 (ブラウン氏 Braun)
- 一、鹽酸古加乙涅 〇、七五 硫酸莫爾必涅 〇、五 一布仙トリニトリン液
- 六、〇 石炭酸 六、〇 蒸餾水 二〇〇、〇
- 一、鹽酸古加乙涅 一、〇 食鹽 〇、六 鹽化アドリナリン溶液 六、〇
- 蒸餾水 一〇〇、〇

一、歐加乙涅 二、〇 食鹽 〇、六 蒸餾水 一〇〇、〇 (フライスツェルク氏)

右ノ數者ハ何レモ其一筒或ハ其以下ニテ足ルベシト雖モ稀ニ二筒ヲ要スルコアリ其他近來米國等ニ販賣セラル、注射液アリ極メテ大ナル差異ナシ

注射部位ハ拔牙セントスル齒牙ノ内外ニ於テテスト雖モ齒根ノ直ニ上面ハ齒齦菲薄緊密ニシテ注射液ヲ吸收スルコ極メテ難シ、故ニ予ハ針尖ヲ先ヅ當該齒牙頰側(或ハ唇側)ノ近心面ニ相當スル齒間齒齦縁ニ挿入シ次デ少シク斜ニ齒根ノ尖端ノ方向ニ壓入シテ極メテ徐々ニ注射シ齒齦ノ全ク蒼白トナルヲ待ツ、蒼白ノ度若シ不充分ナルキハ更ニ同側ノ遠心部ノ齒齦縁ヨリ反對ニ齒根ノ方向

ニ注射スルモ佳ナリ、此ノ如クシテ頰側或ハ唇側齒齦ヲ終リタルキハ同法ヲ舌側ニ於テ行フベシ而シテ全部ノ注射モ一筒ノ液ヲ以テ充分ナリトス乃チ齒齦ハ數分ニシテ知覺全ク消失シ拔牙ヲ行フヲ得ベシ

三、鉗子ノ適用、左ノ注意ヲ以テ鉗子ヲ適用ス

1、可及的高ク齒頸部ニ於テ鉗取スベシ 齒頸部ヲ超ユレバ齒根ノ側面ハ齒根ノ尖端ニ向テ斜面ヲ形成スルヲ以テ鉗子ノ嘴端ヲ閉合スルヤ齒根ハ自ラ舉上セラレ又鉗子ノ滑脱スル患アルコトナシ

2、齒牙ヲ輕ク鉗取スベシ 齒牙ヲ鉗取スルコト強ケレバ破折シ鉗子ノ滑脱スル患大ナリ、故ニ只齒牙ヲ鉗取シテ離サレバヨシトス然ルニ初學未熟者ハ此注意ヲ怠リ只鉗子ノ滑脱センコトヲ怖レテ却テ齒冠ヲ破壞シ遂ニ齒根ヲ鉗取シ能ハサルニ至ラシムルコト少ナカラズ

3、極メテ徐々ニ動搖弛緩セシムベシ 齒牙ヲ鉗取シタルキハ先ツ腕關節ヲ固定シテ毫モ移動スルコトナク上膊ニ力ヲ取リテ極メテ徐々ニ齒牙ヲ内外ニ動搖セシム、初メ先ツ弱ク次テ漸ク強ク遂ニ全ク抵抗ノナキニ至ルマテ之レヲ持續ス、單根齒ニアリテハ便宜回轉運動ヲ加味スルモヨシ

腕關節ヲ固定スルコトハ極メテ必要ナリ之レニ反シテ若シ鉗子ヲ腕關節ニ於テ移動スルキハ運動確實ナラズ齒牙ノ破折スルコト疑ヒナシ

4、動搖弛緩其極ニ達シ毫モ鉗子ニ抵抗ヲ感ゼサルニ至リタルキハ即僅ニ牽引シテ齒槽窩ヨリ齒牙ヲ脱出セシムベシ、強ク且急劇ニ牽引スルキハ附近或ハ對顎ノ齒牙ニ鉗子ヲ衝突セシメ之レヲ破壞スルコトアリ

5、鉗子ノ取扱ヒハ之レヲ靜穩ニシ患者ノ目前ニ於テセザルヲヨシトス、拔牙ハ他ノ外科手術ト異ナルコトナシト雖モ古來傳説等ニヨリ之レニ隨伴スル疼痛ニ恐怖ヲ懷クモノ極メテ多シ故ニ小兒神經質等ノモノニアリテハ殊ニ大ナル注意ヲ要ス

四、後處置、拔牙ニヨリテ生シタル齒槽窩ハ之レヲ放置スレバ出血制止シ難ク又病毒侵入ノ患大ナリ、故ニ適當大ニ切りタル沃度仿膜瓦設ヲ以テ栓塞スルヲ要ス、而シテ出血ヲ抑止センニハ其上ニ數回重疊シタル單純瓦設ヲ置キ充分乃至二十分間顎ヲ堅ク閉合シテ創面ヲ壓迫セシムルヲヨシトス

創面ヲ清潔ニシ病原菌ノ感染ヲ未發ニ防ガンニハ拔牙後數日間緩和ナル防腐消毒劑ヲ以テ含嗽セシムルヲ要ス石炭酸一%、過滿俺酸加里〇、〇五%、フエノール

ル、ソジック」リステリン」バイロゾン」等此目的ニ用ヒラルベシト雖モ最簡單ニシテ適當ナルハ硼酸水三%、或ハ之レニ少許ノ薄荷油(一〇〇、〇〇ニ一滴)ヲ混シタルモノナリトス

拔齒窩ニ於ケル瓦設ハ數日毎ニ之レヲ交換シ其都度創面不潔ナレバ必ラズバイロゾンヲ以テ洗滌スベシ、創面ノ癒合ニ從テ漸々瓦設ヲ縮小シテ遂ニ全ク窩ノ消失スルニ至リテ止ム

第五章 各齒ノ拔去術式

第一節 上顎齒牙ノ拔去

概スルニ上顎齒ノ拔去ハ患者ヲシテ少シク高キ坐位ニ就カシメ其頭ヲ後方ニ傾斜セシムルヲ以テ便利トス、術者ハ右手ニ鉗子ヲ取リ左手ハ唇頰ヲ壓排シテ視野ヲ明瞭ナラシメ且便宜左手ヲ以テ顔面或ハ顎ヲ支エテ頭部ノ移動セザル様ナスベシ、殊ニ左側齒ノ拔去ニ方リテハ患者ノ頭ヲ上膊ト胸側トニテ支フルト下顎齒ノ拔去ノ時ノ如クナルベシ
術者ノ位置ハ常ニ患者ノ右側ヲ便トシ左側齒ノ拔去ニハ少シク前方ニ體ヲ

カ、メサルベカラサルトアリ

一、上顎前齒、齒根ハ單一ニシテ圓錐形ヲナシ眞直ナルヲ以テ鉗子ハ之レニ適合スル直嘴ヲ有シ其内面凹彎ヲ呈スルモノヲ要ス

此ノ如キ鉗子ヲ取リ内外ノ兩嘴ヲ齒牙ノ唇舌兩面ニ適合シ徐々ニ齒根ノ方向ニ挿入シ齒頸部ニ於テ高ク齒根ヲ鉗取ス、然ル後先ツ緩カニ前後ニ一移動ヲ試ミ次テ數回輕ク之レヲ反覆シ最後ニ二三回ノ回轉運動ヲナスト共ニ之レヲ靜ニ下方ニ牽引スベシ

就中側切齒ハ其齒根側方ニ壓扁セララル、ト多キヲ以テ回轉運動ヲ要セザルト多シ

二、上顎犬齒、他ノ前齒ト相似タリト雖モ其齒根強大ニシテ抵抗最強キヲ異ナレリトス、回轉運動ハ又極メテ有効ナラザルト多ク前後運動ヲ主トシ最後ニ前外下方ニ牽引シテ脱出セシム、然レモ其尖端屈曲セルト稀ナラサルヲ以テ殊ニ注意ヲ要ス鉗子ハ可及堅固ナルモノヲ使用スベシ

三、上顎小白齒、圓錐形ニシテ前後ニ壓扁セラレタル齒根ヲ有シ第一小白齒ハ内外ノ二小根ヨリナルト多シ

鉗子ハ銃鎗狀鉗子或ハ堅固ナル直嘴鉗子ヲヨシトス

齒頸部ヲ高ク箠取シタルノ後極メテ徐々ニ輕ク内外運動ヲナシ脱出セシム
回轉運動ハ効力少ナシ

四、上顎第一及第二大白齒、共ニ強大ニシテ三根ヲ有シ頰側ニ二口蓋側ニ一
箇アリ鉗子ハ外嘴ノ内面中央ニ區劃アリ二分岐根ニ適合スル様形成セラレタ
ル者ニノ左右各側ニ應シテ二箇ヲ要ス嘴ハ僅ニ彎曲セルカ或ハ銃鎗狀ヲナス
深ク鉗取シテ徐々ニ内外運動ヲナシ漸ク力ヲ強メテ殊ニ抵抗ノ最小ナル方向
ニ之レヲ動かサスベシ回轉運動ハ決シテ試ムベカラズ齒根ヲ破折スルノ患アリ
五、上顎智齒、齒根ノ形態ハ極メテ不定ニシテ或ハ單根圓錐形ヲナシ或ハ複
根ニシテ著シク放散スト雖モ大抵齒冠ノ形態及ビ髓腔ノ形狀ニヨリ之レヲ察
知スルヲ得ベシ

其形態ニヨリテ同ジカラズト雖モ銃鎗狀ニシテ適宜ノ嘴頭ヲ有スル鉗子ヲ
適用シ内外ニ運動ス單根ナルキハ回轉運動ヲ混ユベシ

第二節 下顎齒牙ノ拔去

下顎齒ヲ拔去スルニハ患者ヲシテ低キ坐位ヲ取ラシメ頭部ハ軀幹ト一直線
ナラシムルカ或ハ少シク前方ニ傾斜セシムベシ

術者ハ患者ノ右側ニ立テテ鉗子ヲ右手ニ取り其右側ノ齒牙ヲ拔去スルニハ
少シク患者ノ右前方ニ進ミ左手ノ拇指ヲ頰ト齒齦トノ間ニ入レテ施術面ヲ明
視スルヲ得セシメ他ノ三乃至四指ハ下顎骨下緣ヲ抑ヘテ顎骨ヲ固定ス之レニ
反シテ若シ下顎左側ノ齒牙ヲ拔去スルニ方リテハ患者ノ少シク右後側ニ立チ
後頭部ヲ超エテ左腕ヲ廻ラシテ頭部ヲ固定シ左手ノ拇指ヲ齒上ニ加ヘ兩指ヲ
以テ唇頰ヲ壓排シ他ノ三指ヲ下顎骨下緣ニ加ヘテ顎ヲ固定スベシ

一、下顎切齒及ビ犬齒、單根圓錐形ニシテ僅ニ側方ニ壓扁セラレテ極メテ強
大ナラズ第百圖ノ如ク直角ニ屈曲セル鉗子ヲ使用ス

深ク齒頸ヲ鉗取シタルノ後徐々ニ前後運動ヲ施シ其充分弛緩シタルヲ待チ
テ僅ニ回轉シツ、前上方ニ脱出セシム

二、下顎小白齒、單根圓錐形ニシテ壓扁ノ度極メテ少ナシ故ニ下顎前齒及犬
齒ニ使用スルト同形ニシテ少シク強大ナル鉗子ヲヨシトス

深ク内外側ニ沿フテ齒頸ヲ鉗取シ徐々ニ一大内外運動ヲ施シ次テ輕ク之レ

ヲ反覆シ最後ニ僅微ナル回轉運動ト共ニ外上方ニ脱出セシム

三、下顎第一及第二大白齒、最堅固ニシテ前後ノ二根ヲ有ス根ハ共ニ扁平ニ

シテ少シク屈曲ス或ハ根尖端ニ至ルニ從ヒ相離開スルコトアリ

鉗子ハ關節ニ於テ直角或ハ鈍角ニ屈曲シ内外ノ兩嚙ハ強堅ニシテ各其内面

ハ二根ニ適合スル截痕ヲ有ス

齒根分岐部ヲ超ユルマデ深ク鉗子ノ嚙端ヲ挿入シ緩カニ且強キ内外運動ヲ

施シ其漸ク弛緩スルニ從テ漸ク其力ヲ増シ最後ニ外上方ニ脱出ス第一大臼齒

ハ第二大臼齒ヨリモ遙ニ強大ニシテ抵抗亦多大ナリ然レモ第二大臼齒モ亦下

顎骨ノ表面ニ於ケル内外ノ斜走起線ニ保護セラレテ頗ル堅ク植立スルコトナ

キニアラズ

四、下顎智齒、ハ形態位置方向ノ一定セザルコト他齒ニ見サル處ナリ或ハ圓錐

形單根ナルコトアリ下顎小白齒用鉗子ヲ以テ拔去スルヲ得ベシ或ハ第一及第二

大白齒ノ如ク扁平ナル二根ヨリナルコトアリ前法ニヨリ拔去スルヲ得ベシ或ハ

前方ニ傾斜シ或ハ外方ニ彎曲シ或ハ一部齒齦ヲ以テ被ハル此ノ如キ際ニハ少

シク強大ナル齒根用鉗子ヲ以テ拔去スルヲ得ベシ

之レヲ脱出セシムルニハ内外ノ運動ヲ主トシ齒根圓錐形ナルモ之レニ回轉運動ヲ交ニ最後ニ外上方ニ脱出セシムルニアリ

第三節 齒根ノ拔去

齒根ノ拔去ハ健全ナル齒冠ヲ有スル齒牙ノ拔去ヨリ遙ニ困難ナルコト往々之レアリ例之拔齒ニ際シ齒冠ノミ破壊シテ齒根ハ深ク堅固ナル齒槽突起内ニ潜入シタルカ如キ或ハ又蝕蝕漸ク進行シテ齒冠消失シ齒根ハ其上ヨリ肥大増殖シタル齒齦ヲ以テ厚ク被覆セラル、時等ノ如シ然レモ朽傷破壊シテ齒槽突起ノ吸收ト共ニ漸ク齒齦ノ表面ニ舉上セラレタル齒根ノ如キハ乳齒ト毫モ撰ブ處ナシ

各齒根ハ其之レニ相當スル齒牙ト同一術式ヲ以テ適當ニ形成セラレタル鉗子ニヨリ拔去スルヲ得ベシ然レドモ齒根若シ齒齦ノタメニ被覆セラレテ鉗子嚙端ノ適合ヲ明瞭ナラシメ能ハサルモハ宜シク齒齦刀ヲ用ヒテ齒根ノ長軸ニ沿ヒ齒齦ニ縱切ヲ加ヘ之レヲ齒根ヨリ剝離シ置クベシ

鉗子ノ使用

發炎腫脹セル齒齦中ニ強ク鉗子ノ兩嘴端ヲ挿入スルハ頗ル大ナル苦痛ヲ惹起スベシ輕ク挺子ヲ以テ一側ヨリ之ヲ挺起スルノ輕易ナルニ如カズ齒質ノ脆弱ニシテ破壞著明ナルモノハ之レヲ鉗取スルノ危險ニシテ破折スルノ患大ナリ挺子ヲ以テ一側ヨリ挺起スルキハ毫モ此ノ危險ニ遭通スルヲナシ又深ク齒齦中ニ潜伏セル殘根ハ其位置限界ヲ明ニスルヲ困難ニシテ從テ之レヲ鉗取スルヲ容易ナラズ之レニ反シ挺子ノ薄刃ヲ一側ヨリ挿入シテ徐ロニ挺起スレバ周圍ノ組織ヲ毀損スルヲナクシテ極メテ平易安全ナリ實ニ挺子ハ熟練セル人ノ手ニアリテハ輕妙ニシテ苦痛ヲ生起スルヲナク拔齒セシムルヲ得ル唯一ノ利器ナリ

顎右側ニ存スル齒根ノ拔去 直嘴或ハ屈曲嘴何レノ挺子ヲ用ユルモヨシ
直嘴挺子ヲ以テ拔去スルノ法 先ツ挺子柄ヲ手掌ニ上セ拇指頭ヲ以テ嘴ノ直下ヲ支ヘ他ノ四指ヲ以テ堅ク柄ヲ把握シ然ル後肘或ハ腕ヲ胸側ニ固定シテ強力ヲ加ヘテ壓迫スルモ器械ノ逸脱スルヲナカラシム左手ハ患者ノ後頭部ヲ超エテ拇指ト地ノ四指トニテ堅ク顎骨ヲ固定シ下顎ノ脱臼或ハ施術中頭部ノ移動スルヲ防グ之ニ於テ右上膊ヨリ徐ロニ力ヲ加ヘテ齒根ヲ挺起スルナリ

但シ上顎ノ場合ニアリテハ肘或ハ腕ヲ胸側ニ附シテ固定スルヲ極メテ不便ナルヲ以テ右拇指頭ヲ隣齒或ハ齒齦上ニ觸レテ力ヲ抑制スベシ(第百四圖)

屈曲挺子ヲ以テ拔去スルノ法 即内方ニ直角ニ屈曲セル挺子ヲ用ヒテ舌側ヨリ齒根ヲ挺起スル方法ナリ

左腕ヲ以テ頭部ヲ固定シ左指ヲ以テ顎骨ヲ固定スルヲ前方ノ如クニシテ挺子ハ之レヲ右四指ニテ堅ク握リ拇指ハ全然之レヲ遊離セシム而シテ靜ニ嘴ヲ齒根ノ舌側ニ當テ、壓入スルヤ遊離セル拇指頭ヲ齒齦或ハ隣齒ノ外側ニ堅ク固定シテ之レヲ支點トシテ挺子ヲ此ノ方向ニ移動スベシ

稍々不便ナリト雖モ上顎ニモ亦此法ヲ適用シ得ベシ但シ上顎ニ於テ此法ヲ要スルハ極メテ稀有ニシテ小白齒根ノ著シク朽傷シ舌側ノミ僅ニ硬固ナル齒質ヲ止ムルキ等ノ如キ之レナリ(第百五圖)

顎左側ニ存スル齒根ノ拔去 直嘴或ハ外方ニ屈曲セル挺子ヲ以テナスヲ得直嘴挺子ヲ以テ拔去スル法 右側ニ使用スルト同一ノ直嘴挺子ヲ以テ同一原理ニヨリ拔去ス即術者ハ患者ノ左側ニ立チ右手ニ直嘴鉗子ヲ握ルヲ前記ノ如ク左手ハ拇指ヲ適宜ノ齒上ニ加ヘ他ノ四指ヲ以テ下顎骨ヲ下方ヨリ支持シ

同一注意ヲ以テ上膊ヨリ強大ナル挺起力ヲ加フルニアリ
 屈曲挺子ヲ以テ拔去スル法 下顎ノ白齒ノ殘根、小白齒前齒ノ齒根等ニ於テ
 之レヲ要スルコト最多シ其法先ツ挺子柄ヲ四指ヲ以テ堅ク手掌中ニ握リ拇指頭
 ヲ嘴ノ屈曲部ニ加ヘ左手ハ頭部ヲ超エテ四指ヲ以テ下方ヨリ下顎骨ヲ支持シ
 拇指ハ之レヲ拔去セントスル齒根ノ内側ニ於テ齒齦上ニ固定シタルノ後徐々
 ニ嘴尖ヲ齒根ノ舌側ヨリ挿入シ適當ノ深サニ達シタルヲ確メ右手ノ拇指側ヲ
 左手ノ拇指側ニ堅ク固定シテ之レヲ支點トシテ挺子ヲ挺起シテ齒根ヲ脱出セ
 シムルニアリ

此法ハ上顎ニ施スコト殆ト不可能ナリ上顎ニアリテハ寧ロ反對ニ此法ヲ以テ
 頰側ヨリ齒根ヲ挺起スルヲ得ベシ

第四節 乳齒ノ拔去

乳齒ハ其齒根短小ニシテ抵抗少ナク且其拔去ヲ要スルハ通例其吸收弛緩シ
 タル後ナルヲ以テ其拔去極メテ容易ナリ直嘴及屈嘴ニケノ鉗子ヲ有スレバ何
 レノモノヲモ拔去スルヲ得ベシ其術式ハ永久齒ト全然相同ジ

只日常ヨク目撃スルガ如ク乳齒根ノ吸收漸ク進行シテ永久齒ノ將ニ萌出セ
 ントスルヤ齒根ノ尖端ハ齒齦ヲ穿通シテ外部ニ露出スベシ此ノ如キモノヲ拔
 去スルニハ露出セル齒根端ト齒冠部トノ間ニ横ハル處ノ齒齦ニ齒齦刀ヲ以テ
 縱切開ヲ加ヘタルノ後根端ニ挺子ヲ適用シテ脱出セシムルヲ最簡單ナリトス
 乳齒ノ拔去ニヨリテ生シタル拔齒窩ニハガーゼヲ挿入スルノ要ナシ只外部
 ヨリ大ナルガーゼノ重疊シタルモノヲ置キ十乃至二十分間顎ヲ閉合シテ創面
 ヲ壓迫セシメ置ケバ足レリ

第六章 偶發症及其所置

一、齒牙ノ破折 拔去セントスル齒牙ハ未ダ齒槽窩ヨリ脱出セサルニ之レヲ

破折スルコト頗ルヨク目撃スル處ニシテ通例左ノ原因ノ一或ハ數者ニ歸ス

1. 鉗子ノ嘴端ノ形狀齒牙ニヨク適合セサリシ時
2. 鉗子ヲ充分深ク齒頸ニ挿入セサリシ時
3. 鉗子ヲ以テ鉗取スルニ強力ヲ用ヒシ時
4. 移動ヲ急劇且粗暴ニナセシ時

- 5. 顎骨殊ニ齒槽突起極メテ強硬ニシテ彈性ヲ有セザリシ時
- 6. 齒質極メテ脆弱ナリシカ或ハ蝕蝕等ノタメニ著シク頽壞セシ時
- 7. 齒根ノ形狀或ハ方向異常ナリシ時

此ノ如クニシテ若シ破折ヲ生シタルキハ更ニ齒根鉗子或ハ挺子ヲ以テ拔去ヲ試ムベシ

二、他齒ノ毀損 鉗子ノ操縱極メテ慎重ナラサルキハ移動ニ際シテ隣齒ヲ弛緩或ハ破壞セシメ又タ齒牙ヲ牽引脫出スルニ方リテ對顎ノ齒牙ヲ毀損スルコト少ナカラズ

若シ破壞ヲ生シタルキハ其實質缺損ノ多寡ニ應シテ充填或ハ義齒術ヲ施シ又其弛緩シタルトキハ數日間之レヲ隣齒ニ結紮固定シテ消炎療法ヲ施セバヨシ

三、軟組織ノ裂傷 鉗子ヲ適用スルニ方リ嘴端ト齒牙トノ間ニ軟組織ヲ間在シテ鉗取スルコトアリ或ハ齒牙ヲ動搖シテ牽引脫出セントスルニ方リ齒根ノ側面ニ附着セル軟組織ヲ共ニ牽引シテ破綻ヲ生セシムルコトアリ

此ノ如ク軟組織ヲ毀傷スルキハ拔牙後出血疼痛ヲ生ジ易ク又感染ノ期會ヲ

作ルコト多シ故ニ鉗子ノ適合ニ注意シ又殘根等ニアリテハ當初ヨリ齒齧刀ヲ以テ軟組織ヲ齒根ヨリ剝離シ置クベシ

裂傷ハ其度ニヨリテ所置ヲ異ニス若シ毀傷ノ度僅微ニシテ小片ノ遊離セルアラバ之レヲ剪切シテ後ニ防腐的所置ヲ怠ラサレハ足レリ之レニ反シ裂傷極メテ大ナルキハ二三ノ縫合ヲ致サ、ルベカラザルコトアリ

四、骨折 骨植堅固ナル多根齒ヲ拔去スルニ方リ其分岐部附近ニ細小ナル齒槽突起ノ破片ヲ附着スルハ敢テ異トスルニ足ラズト雖モ元來齒槽突起ハ其再生力極メテ微弱ニシテ一度折傷シタル處ノモノハ長ク顎骨ニ缺損ヲ止ムベク又其創面ヨリ病原菌ノ侵入ヲ自由ナラシムルヲ以テ極メテ注意セサルベカラズ之レヲ生起スル原因ノ主ナルモノ左ノ如シ

- 1. 鉗子嘴ヲ齒槽上ヨリ適合シテ齒根ヲ鉗取シタル時
 - 2. 動搖弛緩セシムルニ暴力ヲ用ヒシ時
 - 3. 齒根ノ肥大或ハ放散顯著ナリシ時
 - 4. 殘根ト齒槽突起トヲ誤認シタル時
- 要スルニ齒槽突起ハ其營養極メテ旺盛ナラザルヲ以テ大ナル骨片ニアラザ

レバ癒合ヲ望ムト頗ル難シ故ニ普通ノ場合ニアリテハ骨折ノ遊離セルモノハ悉ク之レヲ除去シ後ニ防腐法ヲ施シ置ケバ足レリトス

五、下顎脱臼 下顎後方齒牙ノ拔去ヲ行フニ際シ充分堅ク顎骨ヲ固定セザレバ脱臼ヲ生ズルコトアリ未熟ノモノガ挺子ヲ使用スルキニ最多シ但シ習慣性ニ脱臼スルモノ或ハ骨ヲ脱臼ノ經驗アルモノニアラザレバ容易ニ之レヲ生ズルコトナシ

故ニ拔齒ヲ行フニ方リテハ常ニ顎骨ノ固定ニ注意シ其已ニ脱臼シタルキハ後章ニ述ブル方法ニヨリ之レヲ整復スベシ

六、咽喉ニ齒牙ノ墜落 鉗子ヲ以テ牽引脱出セントスル際齒牙ノ滑脱シテ咽喉ニ落下スルコトアリ更ニ普通ナルハ挺子ヲ以テ齒根ヲ挺起スル時ニアリ故ニ此ノ如キ場合ニハ常ニ齒牙ノ舌側ヨリ器械或ハ指ヲ以テ保護スルヲ必要トス咽喉ニ墜落シタル齒牙ハ多クハ急劇ナル呼吸運動ト共ニ口腔ニ復歸スルモノナリト雖モ其少シク深ク落下スルキハ或ハ其一隅ニ繫留シ或ハ更ニ嚥下セラレ或ハ氣管中ニ下降ス殊ニ全身麻酔ヲ施シタルモノニアリテハ氣管中ニ侵入シテ氣管切開術ヲ施コサ、ルベカラザルコトアリ

咽喉ノ一隅ニ繫留セルモノハ喉頭鏡ノ補助ニヨリ鑷子ヲ以テ摘取シ得ベク嚥下セラレタルモノハ毫モ支障ナクシテ糞便ト共ニ排泄セラル

七、腦貧血 拔齒術中患者卒然眩暈、頭重其他違和苦悶ノ狀ヲ呈シ顔面蒼白トナリ嘔氣嘔吐ヲ催シ體表冷汗ヲ以テ覆ハレ遂ニ失神スルコトアリ腦貧血之レナリ普通ノ場合ニアリテハ失神僅ニ數秒乃至數分ニシテ醒覺スト雖モ稀ニ持續シテ危險症狀ヲ發顯スルコトナキアラズ

拔齒ニ偶發スル腦貧血ハ主トシテ精神作用ノタメニ生起スル處ニシテ不安ノ念慮或ハ恐怖ノタメニ來ルコト最多シ夫ノ注射針ヲ將ニ刺入セントスルヤ否ヤ之レヲ發顯スルモノ、如キ之レヲ證シテ餘リアリ故ニ精神ノ鎮靜セザル神經質ノモノニ多ク殊ニ數日來疼痛ノタメニ不眠ヲ惱ミシ時ニ於テ然リトス饑餓天候不順、頭重、月經疲勞衰弱、一般貧血、脚氣等ハ又之レガ素因ヲナス

所置 術者ハ施術ニ方リ常ニ靜謐平易ニシテ患者ニ不安ノ念慮ヲ與フベカラズ而シテ其發スルヤ先ツ頭部ヲ低下シテ臥位ニ置キ、胸部ニ纏ヘル衣服ノ緊縛ヲ解キ、窓扉ヲ開放シテ新鮮ノ空氣ヲ入レ、心臟部ヲ磨擦シ、酒精飲料、薄荷製劑、甘硝石精等ヲ投與シ或ハ前額及ヒ額顳部ニ酒精劑、薄荷、カンフル等ノ製劑ヲ塗

布スルモヨシ

八、震盪 ハ幸ニシテ拔齒ニ偶發スルコト少ナシ然レモ其顯ハル、ヤ施術ノ大小ニ關係ナク突然ニシテ來リ危態ニ陥ラシムルヲ以テ注意ヲ怠ルヘカラズ其起ルヤ患者ハ急ニ痴呆狀ヲ呈シ周圍ニ行ハル、凡テノ事柄ヲ意ニ介スルコトナク顔面蒼白ニシテ表情ナク前額ニ皺襞ヲ顯ハシ鼻孔擴大セルヲ見ルベシ目ハ陷沒シテ半バ眼瞼ヲ開キ遠所ヲ凝視スルカ如ク瞳孔ハ散大シテ光線ニ反應スルコト遲徐タリ皮膚粘膜ハ蒼白ニシテ手指及口唇ハ數々暗紫色ヲ呈ス體表厥冷ニシテ冷汗ヲ以テ覆ハレ知覺脫失シ四肢ノ運動極メテ緩慢ナリ脈膊ハ細小ニシテ容易ニ觸知シ難ク不規則或ハ間歇性ニシテ或ハ五十至以下ニ減スルコトアリ呼吸亦不規則ニシテ深淺一樣ナラズ精神機能ハ全ク消失セズ問ニ應スルコト極メテ遲シ嘔氣嘔吐、吃逆ノ起ルコト常ナリ

其他所謂亢奮性震盪ナルモノアリ頗ル亢奮シテ燥狂ニ近ク毫モ鎮靜セズ精神明瞭ナリト雖モ恐怖ニ堪サルナリ粘膜面ノ蒼白ナルニ反シ顔面潮紅ヲ呈シテ前額頗ル熱ク眼ハ凹陷スレモ光輝アリテ瞳孔縮小スルコト常ナリ其他ハ殆ト前者ニ同ジ而シテ此兩者ハ相移行スルコト少ナカラズ

所置 施術ヲ中止シテ患者ヲ仰位ニ安靜ノ位置ヲ取ラシメ、衣服ノ緊縛ヲ解

キ四肢及體部ニ乾熱ヲ適用ス湯タンボ等又佳ナリ

其他單ニ徵候的ニシテ酒精、カンフル、珈琲等ノ内服或ハ注射及ヒ亞硝酸亞密爾ノ吸入、温食鹽水ノ灌腸等ハ極メテ有効ナリ

九、出血 血友病其他出血性素質アルニアラズシテ拔齒後出血制止スルコト能ハズ數日ニ涉リテ其持續スルヲ見ルコトアリ之レ或ハ術式ノ當ヲ得サリシニヨルカ或ハ拔齒ニ際シ多大ノ損害ヲ附與シタルニヨルカ或ハ全然患者ノ特異質ニ歸スヘキモノトス

所置 出血ノ度ニヨリテ相同ジカラズト雖モ最有効ナルハ壓迫ナリ

1. 壓迫 ヲ最简单ニ附與スルハ拔齒窩ヲ清潔ナラシメタル後沃度仿謨瓦設ヲ以テ之レヲ栓塞シ其上部ニ數回重疊シタル單純ガーゼヲ置キ顎ヲ閉合シテ數十分間對合齒ヲ以テ創面ニ壓迫ヲ加フルコト拔齒ノ術式ノ條下ニ述ベタルガ如クスルニアリ、當初ヨリ此法ヲ行ヘバ大抵ノ特異質ヲ有スルモノト雖モ出血ヲ招來スルコトナシ顎骨ノ疲勞シタルルハ提顎綑帶ヲ施スモ佳ナリ

數時間以上顎ヲ閉合スルハ頗ル不便ナリ故ニ出血ノ持續スルルハ他ノ方法

ヲ求メザルベカラズ例之拔齒窩ニガーゼヲ以テ栓塞ヲ施シタルノ後ガツタバ
 ーチヤヲ軟化シテ其上ヨリ壓迫シ之レヲ隣齒ニ結着シテ保持セシムルガ如シ
 2. 藥劑 緩和ナル防腐藥ヲ以テ合嗽セシムレバ足レリト雖モ時トシテ收斂
 止血性ノ合嗽料ヲ要スルコトアリ枯礬、單寧、酸密爾拉丁幾等ノ如ク或ハ鹽化ア
 ドリナリン、過鹽化鐵液等ヲ塗布スルモヨシシエッフ氏ハ熱湯ヲ以テ合嗽スルヲ
 稱用セリ其他稀ニ内服藥トシテ沒食子酸、麥角丁幾等ヲ要スルコトアリ

3. 烙鐵、電氣燒灼等又試ムルニ足ル

十、疼痛 拔齒時ニ於ケル疼痛持續シテ漸々増劇シ數日ニ亘ルコトアリ或ハ術
 後一度鎮靜シタルノ後再ヒ増劇スルコトアリ通例淺在性ノ鈍痛ナリト雖モ又廣
 ク放散スル處ノ神經痛性劇痛ナルコトアリ

原因 拔齒時ニ暴力ヲ加ヘシカ或ハ多大ノ毀傷ヲ致シタルカ、急性炎ノ存在
 セシカ、後所置ヲ怠リテ感染ヲ受ケタルカ、或ハ他ニ神經痛ノ原因存在シタルカ
 ハ最普通ノ原因ナリ

所置 拔齒後疼痛ヲ訴フルモノアラバ先ツ其感染ノ有無ヲ確メテ消毒ヲ嚴
 ニスベシ而シテ單純ナル防腐性合嗽料ヲ少シク温ニナシテ用ヒシムベシ或ハ

氷水ヲ用ユルモ同効アリ

齒槽窩ニ塗布藥トシテ使用スルモノ抱水クロラール、古加乙涅、薄荷油、阿片丁
 幾、沃双合劑等アリ其發炎セルキハ鹽化アドリナリン又用ユベシ

内服藥トシテ安知必林、フエナセチン、抱水クロラール、アスピリン等使用セラル
 外頰部ヨリ卷法スルモヨシ濕温ヲ殊ニ有効ナリトス

十一、感染 後所置ヲ嚴ニナサレバ拔齒創ハ感染ヲ蒙ムルコト極メテ容易ナ
 リ最危險ナル偶發症ノ一ニシテ顎骨々疽、蜂窠織炎等ヲ起シテ終ニ患者ノ生命
 ヲ危フスルニ至ルコトナキニアラズ

拔齒後數時間乃至數日ニシテ疼痛徐々ニ加ハリ惡寒發熱シテ體力沈衰シ頰
 部或ハ顎骨附近ニ急劇ナル腫脹ヲ生ジ骨膜炎或ハ蜂窠織炎ニ移行スルハ最怖
 ルベキ順序ナリ

所置 拔齒創ニ違和アレバ直ニ感染ヲ思ヒ之レヲ未發ニ防カサルヘカラズ
 バイロゾンヲ以テ反覆洗滌シカンフオフェニクヲ塗布シ或ハ多量ノ食鹽水、硼酸水
 等ヲ以テ口腔ヲヨク洗滌シ防腐性合嗽劑ヲ投與シ疼痛アレバ外頰部ヨリ卷法
 ヲ施シ其經過ヲ注目スベシ

膿ノ蓄積明瞭トナレバ直ニ之レヲ切開シテ排膿ノ道ヲ講ジ骨質ノ犯サ、ルヲ少ナカラシメ又蜂巢織炎ニ轉スルヲ防クベシ

其四 植齒術 Plantation of Teeth

植齒術トハ故意或ハ偶然ニ齒槽窩ヨリ脱出シタル天然齒ヲ任意ノ齒槽窩ニ挿入シテ固植セシムル方法ヲ云フ大別シテ三トナス

齒牙再植術 Replantation トハ齒槽窩ヨリ故意或ハ偶然ニ脱出シタル天然齒ヲ其同一ノ齒槽窩ニ復歸シテ植立セシムル方法ヲ云フ

再植術ハ植齒術中最古ク行ハレタル者ニシテ或ハジュボン氏千六百三十三年 Dupont- Remede contre le mal de dents ヲ以テ嚙矢トナスモノアレモアムブローニス、パール氏ハ千五百九十四年ニ其著 Opera chirurgica 1594 Ambroise Paré ニ於テ已ニ之レヲ説ケリ

齒牙移植術 Transplantation トハ故意或ハ偶然ニ齒槽窩ヨリ脱出シタル天然齒ヲ他ノ齒槽窩ニ移植シテ固着セシムル方法ヲ云フ或ハ同一人ノ口腔ニ於テ甲齒槽窩ヨリ乙齒槽窩ニ移植スルコトアリ或ハ甲人ノ齒牙ヲ乙人ノ齒槽窩ニ移

植スルコトアリ或ハ新鮮ナル齒牙ヲ直ニ移植スルコトアリ或ハ一定ノ時日ヲ經過シタル齒牙ヲ使用スルコトアリ

フオーシヤル Pierre Fauchard 氏ハ千七百八十六年ニ已ニ之レヲ説述セリ

齒牙移植術 Implantation トハ拔牙後已ニ全部或ハ大部癒合セル齒槽窩ヲ更ニ人工的ニ擴大シテ自己或ハ他者ノ口腔ヨリ得タル天然齒ヲ移植スル方法ナリ
桑港ノ齒科醫ヤンガー Younger 氏ガ千八百八十五年ニ施シタルヲ最初トス然レモブールデ Bourde 氏ハ千七百八十年ニ謂テ曰ク「無責任ナルモノハ齒槽窩ヲ作爲シテ齒牙ヲ植立ス」ト

第一章 齒牙再植術 REPLANTATION OF TEETH.

再植術ハ植齒術中最應用ノ範圍廣クシテ且最多ク成功ヲ得ル處ノモノナリ曾テ消毒法等ノ嚴重ニ施行セラレサリシ時代ニ於テモ尙且良果ヲ收得スルコトヲ得タリト稱スルモノアリ現今諸大家ノ經驗ニヨレバ豫後ノ良好ナルモノハ二十年以上要ヲナサシムルヲ得ベシト云フ
○適○應○症○

- 一、外來ノ暴力ニヨリ齒槽窩ヨリ脫出シタル齒牙 例之打撲、墜落或ハ鉗子ノ亂用等ニヨルモノ、如シ
- 二、根尖端孔外ニ逸出シタル刺戟性物質ニシテ他ノ方法ニヨリ除去シ能ハサル時 例之神經針ノ尖端、繼續齒合釘ノ切片、根管充填物等ノ如シ
- 三、根端附近ノ疾患ニシテ外部ヨリ治療シ能ハサルモノ例之慢性難治ナル根端性齒膜炎、慢性齒槽膿瘍ニシテ原因不明ノモノ、根端附近ニ於ケル沈着物或ハ腐骨小片等ノ存在ノ疑アルモノ等ノ如シ

術式

凡テ植齒術ハ單純ナル術式ノ良否ニヨリテノミ其成否ヲトスベキニアラズ其植立即成功ハ一ニ組織ノ癒合機ニヨルモノナルガ故ニ組織生活力ノ旺盛ナルモノニアラサレバ之レヲ施スベカラズ齒槽突起カ漸ク吸收ノ微候ヲ顯ハセルモノ齒齦緣萎縮其他ノ老人性變化ヲ呈セルモノハ寧ロ之レヲ行ハサルヲ安全トス

左ノ順序ニヨリテ之レヲ行フ

- 一、拔齒 外傷或ハ其他ノ原因ニヨリ齒槽窩外ニ脫出シタルモノハ之レヲ論

セサルモ口腔ニ植立セル齒牙ハ先ツ之レヲ拔去スルヲ以テ再植術ノ第一準備ノ初メトナス

拔齒ヲナスニ就テ最注意スベキハ周圍ノ軟組織、齒槽窩及ヒ齒牙ヲ毀傷セサルニアリ軟組織ヲ毀傷スルキハ癒合ヲ遲滯セシメ且感染ノ期會ヲ増スモノナリ故ニ硬固ニシテ堅ク齒頸部ニ附着セル齒齦ハ拔齒ニ際シ豫メ齒齦刀ノ銳利ナルモノヲ用ヒテ齒頸ヨリ剝離シ置クヲヨシトス、齒槽窩殊ニ其上端ハ齒牙ヲ移動スルニ方リ容易ニ破折スルモノナリ齒槽突起ノ破折ハ齒牙ノ維持ヲ微弱ナラシメ齒槽窩内ニ炎症刺戟ヲ招來スルノ思ヲ生ズルガ故ニ最介意スルヲ要ス齒牙ヲ毀損スルキハ他ニ其代用物ヲ求ムルヲ能ハズ移植術或ハ義齒術ヲ施スノ止ムヲ得サルニ至ルベシ共ニ再植術ノ満足ナルニ如カズ

二、齒牙ノ準備 再植齒トシテ使用スル齒牙ハ齒髓ノ生活セルモノト失活セルモノトノ二アリ其各ニヨリテ處置相同ジカラズ

生活髓ヲ有スルモノニシテ其齒髓ノ毫モ病的狀態ヲ呈セズ細菌ノ感染ヲ受ケサルモノニアリテハ之レヲ其儘ニシテ直ニ使用スルヲ得ベシ再植後齒髓ハ第一期癒合ヲ營ミ或ハ僅微ナル病的變化ヲ受クルノミニシテ長ク其位置ニ止

マルベシ

生活齒髓ヲ有スルモノト雖モ其病的狀態顯著ナルモノ或ハ細菌感染ノ疑アルモノハ之レヲ失活齒髓齒ト同様ニ處置スベシ

失活髓ヲ有スルモノニシテ齶窩ノ已ニ存在セルモノハ之レヲ擴大シテ髓腔ヲ露出シ齶窩ノ存セサルモノハ口蓋面或ハ咀嚼面ヨリ穿孔シテ髓腔ヲ擴大シ腔内ヲ洗滌消毒シタルノ後乾燥シ僱答百兒加或ハ軟性金箔ヲ以テ根管充填ヲ施シ其上ヨリ金屬充填ヲ行フベシ

此ノ如クニシテ準備ノ完了シタル齒牙ハ用時迄之レヲ滅菌食鹽水中ニ容レテ貯フ

但シ變色顯著ナル齒牙ハ根管ヲ清掃シタルノ後一日間バイロゾン中ニ浸漬シテ漂白シ次デ根管充填ヲ行フベシ

三、齒槽窩ノ準備 齒槽窩ハ其外傷ニヨリテ生成シタルト拔去ニヨリテ作爲シタルモノトニヨリテ其準備ヲ異ニス

外傷ノタメニ齒牙ノ脫出シテ生シタル齒槽窩ニアリテハ組織ノ壞死、感染及ビ周圍組織ノ炎症ハ到底免カレザル處ニシテ只僅ニ多少ノ別アルノミ故ニ外

傷後直ニ齒牙ヲ植立スルハ極メテ疑問ナキ能ハズ蓋シ壞死セル組織ハ數日ヲ經過セザレバ健康組織ヨリ分離セズ又感染セル細菌ハ數日後ニアラザレバ其存在ニヨル不良症候ヲ發顯セザルベシ故ニ寧ロ數日間之レヲ猶豫シテ壞疽組織ノ分離シテ齒槽窩ノ健全ナル肉芽ヲ以テ裏裝セラル、ニ至ルヲ待ツベシ三日乃至八日ヲ以テ足レリトナス而シテ此時期ヲ經過スル間ニ細菌ノ感染セルモノアレバ多少其病的症候ヲ顯ハスベシ

故ニ齒槽窩ハ外傷後直ニ多量ノ滅菌食鹽水ヲ以テ之レヲ洗滌シテ異物ヲ去リ能ク其内景ヲ窺視シタルノ後遊離セル組織片アレバ之レヲ除去シ次テ洗滌用バイロゾンヲ用ヒテ之レヲ反覆洗滌スベシ然ル後沃度仿謨ガ―ゼヲ以テ齒槽窩ヲ栓塞シ防腐性含嗽料ヲ投與スガ―ゼハ日々之レヲ交換スルヲ要ス又若シ周圍組織ノ發炎顯著ナルキハ醋酸礬土水ノ罌法ヲ用ヒシムベシ此ノ如クニシテ數日ヲ經過シ炎症消退シテ毫モ異常ヲ認メザレバ齒牙ノ植立ヲ行フ
拔、齒ニヨリテ故意ニ作爲シタル齒槽窩ハ少シク之レト趣ヲ異ニス即此ノ如キ齒槽窩ハ兼テ無菌的狀態ノ下ニ生成セラレタルモノニシテ外方ヨリ新ニ病毒ノ感染セラレタルトナク組織ノ毀傷顯著ナラザルヲ以テ炎症壞疽ヲ生起ス

ルコ少ナシ故ニ此ノ如キ齒槽窩ハ先ヅ其内部ニ異常ノ存否ヲ確メ之レニ適當ナル處置ヲ加ヘタルノ後滅菌食鹽水及バイロゾンヲ以テ順次洗滌スルキハ直ニ齒牙ノ植立ヲナスヲ得ベシ但シ拔去シタル齒牙ヲ準備スルニハ一定ノ時間ヲ要スルヲ以テ其間齒槽窩ニハ滅菌ガーゼ或ハ沃度仿謨ガーゼヲ挿入シ置クベシ或ハ數日間放置スルモ差支ナシ然レモガーゼハ之レヲ日々交換シ口腔ハ防腐劑ヲ用ヒテ斷ニス含嗽セシムルヲ要ス

四 齒牙ノ植立及固定 齒牙及ヒ齒槽ノ準備完了シタルキハ齒牙ヲ齒槽窩ニ植立シテ之レヲ其位置ニ固定シ癒着スルヲ待ツ

植立ハ極メテ容易ニシテ齒牙ヲ輕ク拇指ト示指トニテ撮ミ齒槽窩ニ挿入シテ毫モ壓下スルコトナクシテ徐々ニ回轉運動ヲ雜ヘツ、齒槽窩底ニ達セシムルニアリ然レモ拔齒或ハ外傷後數日ヲ經過シタルモノニシテガーゼヲ以テ堅ク栓塞セラレサリシモノハ内腔少シク縮小セルヲ以テ挿入ニ際シ多少ノ抵抗ヲ認ムベシ此ノ如キ時ハ齒根ノ尖端ヲ僅ニ切除シテ圓滑ナラシムルモ障害ナシ 固定ハ齒列矯正術中ニ述ブル處ト相似タリ即當該齒ヲ中心トシテ兩隣齒ニ亘ル處ノ環帶或ハ金帽ヲ調製シテ合着スルニアリ或ハ銀線又ハ結紮糸ヲ以テ

兩隣齒ニ繫着スルモ佳ナリ

然レモ植立及固定ハ同時ニ之レヲ行フヲ便宜トス即先ヅ拔齒セサル以前ニ口腔ノ印象ヲ採得シ石膏模型ヲ作り之レニ則リテ當該齒及兩隣齒ニ適合スル環帶或ハ金帽ヲ調製シ置キ齒牙及齒槽窩ノ準備成リテ將ニ植立ヲ施サントスルニ際シ當該齒ハ先ヅ之レヲ口外ニ於テセメントヲ以テ環帶或ハ金帽ノ適當ナル部ニ合着ヲ終リ而シテ口内ニ於ケル兩隣齒ニハ嚴重ナル防濕法ヲ施コシ齒牙ヲ植立スルト同時ニ環帶ヲ兩隣齒ニ通過セシメセメントヲ以テ之レヲ合着シ其全ク硬化スルマデ其防濕法ヲ持續スルニアリ

其他簡便ナルハ結紮糸ヲ以テ固定スルニアリ其法先ヅ口外ニ於テ植立セントスル齒牙ヲ前後ニ於テ結紮シ同時ニ口内ニ於ケル兩隣齒ヲ各別ニ結紮シ置キ次テ齒牙ヲ徐々ニ齒槽窩内ニ挿入シテ相對合スル結紮糸端ヲ各自結紮スルニアリ

五 後處置 施術後ハ無刺戟性防腐藥例之バイロゾン、硼酸メಂತ水等ヲ以テ日々含嗽セシムルコト前述シタルガ如シ局所ハ之レヲ毎日或ハ隔日検査シテ其固定狀態ト癒合ノ正否ヲ注意シバイロゾンヲ以テ洗滌シ發炎セル周圍ノ組織

ニハ沃双合劑ヲ塗布スベシ

固定裝置着用ノ時日ハ常ニ相同シカラズ小白齒及白齒ハ對合齒トノ撞着ヲ避クル能ハサルヲ以テ數ヶ月間金帽ヲ以テ完全ナル固定ヲナスヲ要ス前齒ニシテ對合齒ノ撞着ナク經過善良ナルモノハ數週間ニシテ足レリ予ハ最短一週日ニシテ固定裝置ヲ除去シ同様ナル効果ヲ收ムルヲ得タリ

再植術ニ於テ起ル組織的變化

再植術ニ關與スル處ノ組織ハ主トシテ齒根ノ外側即白堊質ト齒膜ニシテ又若シ齒髓ノ生活セルモノアルキハ齒髓モ亦多少ノ變化ヲ生ズ

抑再植齒ノ固植スルニ至ル理由ハ何ゾヤ之レ數種ノ組織的變化ニヨルモノニシテ大略左ノ如シ

一、第一期癒合 極メテ良好ナル狀態ノ下ニ適當ノ所置ヲナシテ再植スルキハ一度斷絶シタル白堊質齒膜間ノ連絡ハ直ニ回復シ創面ハ第一期癒合ヲ營ムベシ是レ最良ナル結果ニシテ再植齒ハ數日ニシテ全然固植スルニ至ル

二、白堊質表面ノ吸收 齒膜白堊質間ノ連絡第一期癒合ヲ以テ恢復セシト否トヲ問ハズ白堊質ノ表面ハ破骨細胞ノ發顯ニヨリテ所々ニ不正ナル蠶蝕ヲ生

ジ深淺不同ノ凹窩ヲ呈スルコトアリ凹窩ハ白堊質面ト齒膜纖維トノ連絡ヲ確實ナラシムルモノニシテ或ハ初メ破骨細胞ヲ以テ充塞セラレト雖モ時日ヲ經過スルニ從ヒ肉芽細胞其位置ヲ占メ其化灰ニヨリ白堊質或ハ骨樣組織ヲ生成スルニ至ルベシ

三、化灰 白堊質ノ表面ニ生ジタル吸收窩ハ無限ニ存在スルモノニアラズ一定ノ時日ヲ經過スレバ多クハ化灰シテ齒質ニ生ジタル實質缺損部ヲ補綴スベシ加之其化灰度ヲ超エテ旺盛ナルキハ齒膜モ一部分化灰ノ終ニ齒根ノ表面ハ齒槽窩ノ内面ト限局性骨性癒着ヲ生スルニ至ルコトアリ

四、器械的適合 再植齒ハ又恰モ夫ノ濡レ紙ヲ卷付ケテ挿入シタル木釘ノ如ク器械的ニ維持ヲ助ケラル、モノナリ蓋シ齒膜ハ強靱彈性ヲ有シテ如何ナル部分ヲモ全ク填塞シ加フルニ齒根ト齒膜トノ間ニ微細ナル空隙アレバ炎症滲出物ハ茲ニ侵入シテ終ニ新組織ヲ成形シテ之レヲ可不及ナク填塞スルニ至ルベケレバナリ

再植術失敗ノ理由 然ルニ再植術ハ常ニ必ラズシモ成功スルモノニアラズ或ハ當初ヨリ毫モ固植ノ起ラサルコトアリ或ハ一度固植シタル者再ヒ弛緩ヲ初

テ終ニ全然齒槽窩ヨリ脱出スルニ至ルコアリ其理由種々アリ

一、感染 再植ニ際シ消毒ヲ怠リ或ハ徒ニ施術ヲ急キテ壞死組織ノ分離ヲ待タサルキハ再植後化膿性齒膜炎ヲ生起シテ齒膜白堊質間ノ連絡ヲ恢復シ能ハサルコアリ

二、固定不全 再植後固定不完全ナルキハ咀嚼、談話、齒刷子ノ使用等ニ際シ弛緩動搖シテ靜止スルコ能ハズ齒膜ト白堊質トノ癒合機極メテ遲滯シ或ハ全然休止シテ容易ニ細菌ノ侵入ヲ容ルシ固植セサルコアリ

三、齒根ノ吸收 前述ノ如ク再植後白堊質ノ表面ニ數多ノ微細吸收窩ヲ生成スルコハ極メテ稀有ナラズト雖モ其吸收作用時トシテ其度ヲ超エ只ニ白堊質ノミナラズ之レヲ侵蝕シ盡シテ遂ニ象牙質ニ到達スルコアリ此ノ如キニ際シテハ施術後一タビ固植シタル齒牙再ヒ弛緩ヲ初メ遂ニ全ク脱出スルニ至ルコナキニアラズ

生活齒髓ノ運命 再植齒牙若シ生活齒髓ヲ有スルキハ極メテ稀ニ第一期癒合ヲナシテ齒髓ト齒膜トノ連絡復舊スルコナキニアラズト雖モ夫ノ根尖端孔ノ微細ナルニヨリ齒髓組織ヲ充分營養スベキ多量ノ血液ヲ送付スルコノ容易

ナラザルヲ思ハザルベカラズ故ニ齒髓ハ再植後一部或ハ全部ノ壞疽ニ陥リ種々ノ變性ヲ致ス纖維樣變性、脂肪變性及ヒ石灰變性ヲ其ノ最トナス、但シ此ノ如キ變性ハ敢テ顯著ナル臨牀的症候ヲ呈セザルガ故ニ外部ヨリ之レヲ窺知スルコ難シ但シ不幸ニシテ化膿菌ノ侵入スルコアレバ齒髓ハ容易ニ化膿シテ破壊スルニ至ルコ勿論ナリ

豫後 體質善良ナルモノヲ撰ヒテ施術其當ヲ得レバ豫後極メテ佳良ナリ固植充分ナルキハ數十年間其機能ヲ營爲セシムルヲ得ベシ

第二章 齒牙移植術 TRANSPLANTATION OF THE TEETH.

移植術ハ米國齒科學ノ發達シ初メタル頃ニ隆盛ヲ極メタルモノニシテ米國ニ於テ初メテ之レヲ施シタルハ佛人ルメール氏 Lemaire ニシテ實ニ千七百八十一年ナリトス、然レモ其漸ク擴布セララル、ヤ失敗モ亦漸ク知悉セラレ加フルニ近世ニ至リ無髓齒ノ治療繼續架工術等ノ進歩スルニ及ビテ移植術ハ又昔日ノ如キ盛運ヲ見ルコ能ハザルニ至レリ現時ニアリテハ其應用極メテ制限セラレ

タリト稱スベシ

適應症

- 一、外傷ニヨリ偶然齒牙ノ脱落シタルモノ
 - 二、殘根ニシテ朽傷甚シク繼續術ヲ施シ難キモノ
 - 三、凡テノ療法ヲ以テ治療セザル齒根ノ疾病アルモノ
 - 四、齒列不正ノモノ、例之犬齒ガ外方ニ突出シテ第一小白齒ハ其位置ヲ占領シ齒列内ニ犬齒ヲ容ル、コ能ハザルモノ如シ此ノ如キ場合ニアリテハ第一小白齒ヲ拔去シテ犬齒ヲ其位置ニ移植スルガ如シ
- 此等ノ適應症ト雖モ移植スベキ齒牙ヲ所有スルニアラザレバ之レヲ施スコト難シ但シ其新鮮ナルト乾燥セルトハ問フ處ニアラザルナリ

術式

- 一、拔齒 普通ノ術式ニヨリ齒牙及ビ周圍組織ヲ毀傷セザル様注意シテ拔齒シ其凹窩ハ齒牙ノ準備完成シ且齒槽窩ノ炎症全ク消退スルマデ沃度防護ガトゼヲ以テ栓塞ス但シガーゼハ時々之レヲ置換シ凹窩ハ防腐藥ヲ以テ洗滌スルコト再植術ト同ジ

二、齒牙ノ撰擇及ビ準備 移植セントスル齒牙ハ可及的新鮮ナルモノヲヨシトス然レモ大小形狀色彩共ニ適當ナル天然齒牙ヲ得ルコト極メテ容易ナラサルヲ以テ多クハ兼テ拔去シテ稀薄酒精中ニ貯ヘ置タル齒牙ノ中ヨリ之レヲ撰擇スルモノトス乾燥齒牙ハ其髓腔ヲ充分ニ擴開シテ内部ヲ清掃シ消毒シテ根管充填ヲナスコト再植術ニ於ケルガ如シ而シテ其齒根ノ形狀及方向ガ拔齒窩ニ適合スルヤ否ヤヲ口腔ニ就テ試ミ任意カイポランダム輪子等ヲ以テ鑿刮成形スベシ

若シ大小形狀ノ適當ナル天然齒牙ヲ得ル能ハサルキハ先ツ齒根ノ類似シタル齒牙ヲ取り齒冠部ヲ鋸斷シ之レニ大小形狀色彩共ニ適合スル處ノローガン氏齒冠ヲセメントニテ合着シ之レヲ天然齒ト同様ニ植立スルモノアリ

但シ他人ノ口腔ヨリ得タル齒牙ハ殊ニ消毒ニ注意シ二十四時間以上五布仙石炭酸水或ハ千倍昇汞水中ニ浸漬スルヲ要ス

三、齒牙ノ植立及ヒ固定 先ツ移植齒ヲ充分消毒シ齒冠部ヲ乾燥シタルノ後兼テ調製シ置キタル鑲帶ヲ移植ニ先ツテセメントニテ合着シ同時ニ他方ニ於テハ口腔ニ於テ齒槽窩ヲ洗滌消毒シ兩隣齒ニ防濕法ヲ行ヒ齒牙ヲ植立スルト

同時ニ隣齒ニセメントヲ以テ鑲帶ヲ合着ス
鑲帶ニ代フルニ金帽或ハ結紮糸ヲ以テスルモヨシ

四、後療法 再植術ニ於ケルカ如ク時々移植齒ヲ検査シテ洗淨シ反應性炎ノ
發起スルアレバ沃双合劑ヲ周圍ニ塗布シ且絶エス防腐性含嗽劑ヲ使用セシム
固定ハ四乃至八週間之レヲ持續ス

移植術ニ隨伴スル組織的變化

第一期癒合ニヨリテ齒膜ト白堊質トガ其連絡ヲ復得スルコトハ極メテ稀有ナ
リ但同人或ハ他人ノ口腔ヨリ拔去シタルモノヲ即時ニ移植シ得ル時ニ於テノ
ミ之レヲ見ル然レモ他人ノ口腔ヨリ得タルモノハ強力ナル消毒藥ニ觸接セシ
ムルヲ以テ新鮮ナル状態ノモノヲ移植スルコト能ハズ從テ第一期癒合ヲ期待シ
得ルハ極メテ稀有ナリ

器械的適合 移植術ニアリテハ夫ノ再植術ノ如ク齒根ト齒槽窩トノ適合極
メテ緊密ナラズト雖モ兼テ口外ニ於テ齒根ヲ略齒槽窩ノ形狀ニ一致スル様調
製シテ而シテ植立スルトキハ齒膜ハ先ツ其弾力性ニヨリテ大概過不及ナク各
部ニ適合シ加之齒膜ノ表面即白堊質トノ接合部ニ逸出シタル滲出物ハ忽チニ

シテ凝固成形シ幾モナクシテ纖維性物質ニ變シテ齒膜ト白堊質表面トノ適合
ヲ補フベシ

吸收窩ノ形成 白堊質ノ表面ニ吸收窩ノ微細ナルモノ無數ヲ生ジテ恰モ齒
根表面ニ刻目ヲ附與シタルカ如キ外觀ヲ呈シ以テ齒膜纖維ノ附着ヲ強固ナラ
シム窩ハ或ハ多核不正形ノ巨態細胞ヲ以テ充塞セラレ或ハ骨樣質ノ沈着ヲ顯
ハス

化灰 吸收窩ハ時日ヲ經過スルニ從ヒ骨樣質ノ沈着ニヨリテ其缺損漸ク細
小トナリ遂ニ全然沒了セラレ、コトアリ加之化灰ハ更ニ進行シテ齒膜ノ一部ヲ
侵襲シ骨質ニ達シテ茲ニ白堊質ト骨質トヲ連絡セシムルコトアリ
豫○後○

施術ノ豫後ハ之レヲ再植術ニ比スルニ極メテ良好ナリト稱スル能ハズ殊ニ
乾燥セル齒牙ヲ使用スル時ニ於テ然リトス故ニ施術後固定ヲ完全ニシ消毒ヲ
嚴重ナラシメサレバ細菌ノ侵入スル患多シ
施術ノ經過佳良ニシテ全然固植スルキハ十數年間其要ニ堪フヘシト云フ

第三章 齒牙嵌植術 IMPLANTATION OF TEETH.

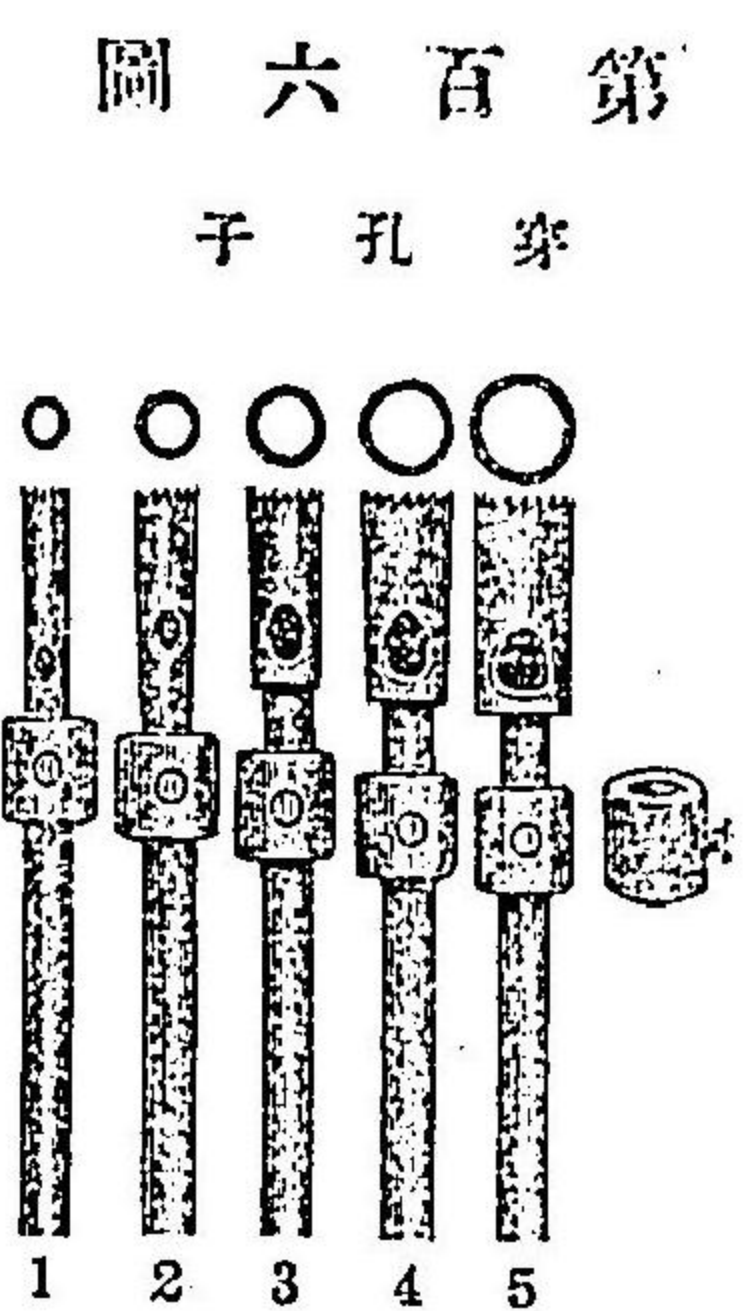
嵌植術ハ千八百八十五年ヤンガー氏ガ初メテ施シタルモノナリト雖モ其効
果確實ナラズ加フルニ一方ニ於テ繼續術架工術等ノ進歩スルアリ從テ氏以後
ニ之レヲ實施スルモノ又多カラズ寧ロ一實驗ニ過キズト謂ツベシ
利○害○

ヤンガー氏ノ謂フ如ク顎骨ノ任意ノ部ニ於テ已ニ收閉シタル齒槽窩ヲ
再ビ開鑿シテ他ヨリ得タル天然齒ヲ植立セシメ得ヘキ理ナリ故ニ其効果常ニ
良好ナリトセバ又義齒術ノ用ヲ絶ツベキナリ然リト雖モ僅ニ齒膜或ハ骨膜ノ
癒合力ノミニヨリテ維持セラル、齒牙ノ長ク口腔ニアリテ其要ヲ營ムヘキハ
極メテ疑ナキ能ハズ

試ニ茲ニ數齒缺如シタル齒穹アリトセヨ一方ヨリ序ヲ追フテ悉ク之レニ嵌
植術ヲ施コサントスルモノアラシヤ其煩ニ堪エサルベシ之レニ反シ茲ニ齒穹
中一齒ノ缺如セルモノアリトセヨ誰カヨク効果ノ疑ハシクシテ且煩雜ナル嵌
植術ヲ施スモノアラシヤ一部義齒或ハ架工義齒ハ實用外觀共ニ遙ニ優レル効

果ヲ與フルヲ得ベシ

術○式○



先ツ大小形狀色彩ノ適當ナル新鮮或ハ乾燥齒ヲ撰ヒテ髓腔ヲ開擴シテ根管
及髓腔ヲ通法ノ如ク充填シ次デ其對合齒ト
ノ咬合狀態ヲ試ミテ成形ス

齒牙ノ準備成リタル時ハ口腔ヲ完全ニ消
毒シ局處麻醉ノ下ニ銳利ナル切開刀ヲ用ヒ
テ施術部ノ齒齦ニU字形切開ヲ施シテ骨質
ニ達セシム而シテ骨膜起子ヲ以テ軟組織ヲ
骨質ヨリ剝離シ方形骨膜瓣ヲ作ル其基底ハ内外何レニ向フモ佳ナリ

次イテ露出シタル骨質ニヤンガー氏穿孔子(第百六圖)ヲ用ヒテ適當大ノ凹窩
ヲ作り時々齒牙ヲ試植シテ對合齒トノ關係ヲ檢シ其適當ナルニ至レバ更ニ凹
窩ヲ洗滌消毒シテ齒牙ヲ植立シ隣齒ニ結紮シ或ハ再植術ニ於ケルカ如ク環帶
或ハ金帽ヲ用ヒテ固定ヲナス
施術面ハ時々洗滌消毒シテ且絶エス防腐性含嗽ヲナサシムル丁前法ノ如シ

固定ハ少クトモ一二月之レヲ持續スルヲ要ス
 氏ノ説ク處ニヨレバ嵌植齒ノ維持ハ一ニ齒膜ノ機能ニヨルモノニシテ齒膜
 ハ拔齒後齒槽窩ノ閉澗シタル後更ニ數ヶ月ハ其附近ニ遺存スル者ニシテ嵌植
 術ヲ施スヤ齒膜ハ其外面ヲ以テ骨膜及骨質ニ連續シ内面ヲ以テ齒根トノ連絡
 ヲ營ミ茲ニ假骨質ヲ形成スルモノナリト
 數年以上此方法ヲ以テ齒牙ノ機能ヲ營マシムルヲ得ベシト云フ

其五 齒牙矯正術 Orthodontia.

齒牙矯正術トハ一或ハ數齒ノ位置ノ異常齒列不整ヲ矯正シテ口腔ノ機能ヲ
 完全ニ營爲スルヲ得セシムル方法ヲ云フ

齒科醫學ガ一般醫學ノ一分科トシテ特立スルニ至リシヤ否ヤ幾モナク齒牙
 矯正術ノ起始セルハ記録ノ示ス處ニシテ殊ニ埃及ニ於テ當時最隆盛ナリシガ
 如シ故ニ埃及時代ノ木乃伊ヲ檢スルニ轉位齒ヲ一定ノ位置ニ致サンガタメニ
 金銀線並ニ副木等ヲ使用セル痕跡ヲ認ムベシ然レモ其學術的進歩ヲナセシハ
 漸ク最近三十年ニシテコフィン、アングル、ギルフォード、ジャクソン等與ツテ力アル
 處トナス

第一節 適應症

齒列ノ不正ハ如何ナル種類及ビ程度ノモノヲモ矯正シ得ヘキヤ否ヤハ極メ
 テ疑問ニ屬ス
 然リト雖モ後條ニ説ク處ノ矯正ノ條件ニシテ許スヘクンバ左ノ種類ノモノ

ハ之レヲ矯正法ニヨリテ整復スルヲ得ベシ

一、轉位齒、Malposed Teeth. ハ齒列不正ヲ生スル最大原因ニシテ其一齒ニ止マルコアリ或ハ數齒同時ニ轉位スルコアリ齒穹ノ内側ニ轉位スルキハ齒穹ヲ狹窄ナラシメ外側ニ轉位スルキハ齒穹ヲ不正ニ擴大ナラシム

轉位ノ最多ク顯ハル、ハ前齒部ナリトス蓋シ前齒ハ單根圓錐形ニシテ抵抗比較的少ナク且永久前齒ハ乳齒列以外ニ萌出スルモノナルヲ以テ動モスレバ列外ニ占位セントス

轉位齒ハ齒列内ニ之レヲ容ル、ノ空隙存在スルキハ容易ニ矯正力ヲ加ヘテ整復シ得ヘシト雖モ若シ齒列ノ大サニ比シテ齒牙ノ幅員大ナルキハ一或ハ數齒ヲ犠牲ニ供セサルベカラサルコアリ故ニ一轉位齒ヲ目撃シタルキハ先ツ其齒穹ノ正常ナルヤ否ヤヲ研究シテ然ル後ニ矯正術ヲ施スヘキヤ否ヤヲ決定セサルヘカラズ

二、捻轉齒、Tortion 齒牙ガ其長軸ニ沿フテ廻轉シテ生スルコアリ之レヲ捻轉齒ト云フ單根圓錐形ノ前齒ニ最多シ其上顎前齒ニ顯ハル、ヤ發音不明瞭ニシテ外觀不良ナリ故ニ之レヲ廻轉シテ齒列内ノ正位ニ矯正スルヲ要ス

三、齒穹ノ異常、Abnormities of dental arch. 齒穹ハ橢圓形ニシテ齒牙ハ整然一列ヲナシテ其内ニ植立スルモノナリト雖モ齒槽突起ノ發育不正ナルカ或ハ數齒ノ轉位スルモノアルキハ種々ナル不正形ヲ呈スV字形齒穹、弧形齒穹、狹縮齒穹等ノ如シ此等ノ齒穹ハ外觀不良ニシテ發音及ヒ咀嚼ノ機能ヲ障礙スルコト大ナリ

四、齒牙長徑ノ異常、Abnormities of length of teeth. 齒列内ニ齒牙ノ植立スルヤ其長徑比較的相一致シ上下顎骨ヲ閉合スレハ各齒一樣ニ對合齒ト相咬合スル者ナリ、然レモ其中ノ一或ハ數齒長キニ過クルキハ他ノ齒牙ハ對合齒ト咬合スルコト能ハサルベシ之レヲ延長齒ト稱ス之レニ反シ齒列中ノ一或ハ數齒短キニ過クルキハ咬合ニ方リ對合齒ト相觸接スルコト能ハス之レヲ短縮齒ト云フ

延長齒或ハ短縮齒ノ何レニヨルヲ問ハズ數齒ガ對合齒ト咬合スルコト能ハサル状態ヲ咬合缺如ト稱ス其前方ニ於ケル數齒ガ相離開セルヲ殊ニ開咬ト云フ凡テ齒長ノ異常ニヨリテ生起セラル、不正ノ咀嚼及ヒ發音ニ多大ノ障妨ヲ致スモノナリトス

五、顎骨ノ突出、Protrusion of Jaws. 顎骨殊ニ前齒部ノ齒槽突起ガ前方ニ突出シテ不良ナル外觀ヲ呈スルコアリ或ハ一顎ノミナルコアリ或ハ上下兩顎ナルコ

アリ或ハ下顎骨ノ頤部ニ於テ顯著ナルコトアリ其突出多大ナルハ齒牙ハ口唇外ニ暴露シ發音不明瞭ニシテ談話ノ際口角泡ヲ飛バヌノ奇觀ヲ呈ス

第二節 條件 Conditions

前述ノ如ク齒牙及顎骨ノ矯正ハ常ニ必ラズシモ成功スルモノニアラズ故ニ一定ノ條件ヲ具備セルモノニアラザレバ之レヲ施スノ至當ナラザルコトアリ

一年齡 滿十三歳ヨリ十八歳ノモノハ矯正術ヲ行フニ最適當ナリ十三歳以下ノモノハ骨質ノ化灰極メテ進行セザルヲ以テ齒牙ヲ容易ニ移動シ得ベシト雖モ其矯正シタルモノガ舊位ニ復歸セントスル傾向大ニシテ固定容易ナラズ且矯正ノ必要ヲ自認スルノ力ニ乏シク從テ矯正術ニ伴フ種々ノ苦痛或ハ煩勞ニ堪エザルヲ以テ効果頗ル疑ハシ

之レニ反シ年齡漸ク進ンデ十八歳ヲ超ユルヤ骨質ノ化灰漸ク完成シ齒牙ヲ移動スルニ多大ノ抵抗ヲ生ジ且年齡ト共ニ漸ク再生力ヲ減ズルヲ以テ齒牙ノ移動ニヨリテ生ジタル骨質吸收部ノ代償極メテ容易ナラズ矯正齒ノ固定ニ長時日ヲ要ス且此時期ハ漸ク社會ニ出ントスルノ時ニシテ動モスレバ矯正ノタ

メニ時日ヲ捧グルコト難キコトアリ之レヲ以テ可及的適當ノ時期ニ矯正術ヲ施スヲ要ス

二健康狀態 凡テ矯正術ハ其施術ニ少カラザル時日ヲ要シ且ツ其ノ口腔ノ機能殊ニ咀嚼運動ニ多少ノ拘束ヲ加フルヲ以テ或ハ消化不良營養不給ヲ生起スルノ患ナキ能ハズ故ニ健康不良ナルモノニハ先ヅ其健康ヲ恢復セシメテ然ル後ニ之レヲ施スベシ

其他健康不良ナルモノハ組織ノ恢復力ニ乏シク矯正術ノ効果ヲ危カラシムルコトナキニアラズ

三認識力 矯正術ヲ施スニハ一定ノ時日ト費用ト及ビ不快ニ堪フルノ忍堪力トヲ有スルノ患者ナラザルベカラズ而シテ之レ實ニ矯正ノ必要ヲ認識スルモノニアラザレバ望ムベカラザル處ナリ幼若者常識ノ少ナキモノ及ビ不整ノ程度輕微ナルモノニアリテハ極メテ疑ハシ要スルニ矯正術ハ術者ノ能力ニ據リテ成否ノ別ヲ生ズルノミナラズ又患者ノ忍堪力及ビ認識力ニ待ツ處些少ナラズ時期ヲ過マラズシテ矯正力ヲ増減シ或ハ口腔ヲ不潔ニ陥ラシメザル等凡テ之レナリ而シテ之レ實ニ矯正術ノ効果ニ至大ノ影響ヲ有スルモノタリ

第三節 矯正ノ原理 Principles of Regulation.

齒列ヲ矯正スルニハ或裝置ヲ以テ徐々ニ齒牙殊ニ齒冠ノ一部ニ牽引力或ハ追進力ヲ加エ齒槽突起ノ實質ニ緩徐ナル骨質吸收ヲ起サシメテ以テ齒牙ヲ移動スルヲ常トス移動シタル齒牙ハ整復當時ニアリテハ弛緩セリト雖モ一定ノ時日間完全ニ之ヲ固定スルキハ再ヒ周圍ニ骨質ヲ新生シテ齒牙ハ固植スルニ至ルベシ故ニ矯正術ハ之レヲ左ノ四段ニ分ツテ施スモノトス

第一 空隙ノ作爲 Making a Space

轉位セル齒牙ヲ齒列内ニ整復センニハ先齒列内ニ之レヲ容ル、ノ空隙ナカ
ルベカラズ然ルニ齒列ハ常ニ必ラズシモ此空隙ヲ具備スルモノニアラズシテ
或ハ僅ニ之レヲ有シ或ハ全然之レヲ缺如ス要スルニ之レ齒牙ト顎骨ノ大サト
ノ不調和ニ基クモノニシテ齒牙ノ大ナルカ或ハ顎骨ノ小ナルカニ歸スベシ齒
牙ノ過剩ニシテ顎骨ガ其全部ヲ受容シ能ハサルキハ其中ノ比較的要用ノ少ナ
キモノ一或ハ數ケヲ省除シテ齒列ノ不正ヲ整復スベシ之レニ反シ顎骨ノ小ニ
過クルニ方リテハ宜シク之レヲ擴大シテ以テ齒牙ヲ齒列内ニ受容セシムベキ

ナリ

齒牙ノ大ニ過クルカ顎骨ノ小ニ失スルカヲ判斷スルハ極メテ難事ナリトス
然レモ口腔ノ機能ヲ完全ニ營爲スルヲ得テ而カモ顔貌ノ正常ナルキハ吾人ハ
之レヲ以テ正常ナル齒列ナリトナス故ニ之レヲ標準トシテ矯正ヲ企圖シ得ベ
キナリ

齒列内ニ空隙ヲ作爲スルニ左ノ三法アリ

一、隣齒ノ側壓 齒列内ニ於ケル空隙ノ不足極メテ僅微ナルキハ兩隣齒ヲ側
方ニ壓開メ以テ所望ノ空隙ヲ作ルヲ得ベシ之レ齒間分離法ニ於ケルガ如ク對
側ノ齒膜ガ其彈性ニヨリテ扁平菲薄トナルニヨルモノ、如シ尙少許ノ空隙ハ
之レヲ行フニ先ダチ兩隣齒ノ側面ヲ少シク鏟刮シテ狭小ナラシムルニヨリテ
收得セラルベシ

二、拔齒 齒列ノ大サ正常ニシテ轉位齒ヲ受容スルノ空隙ヲ有セズ而カモ轉
位齒ハ緊要ナル齒牙ニシテ之レヲ拔去シ能ハサルキハ齒列中ニ植立セル齒牙
ニシテ比較的緊要ナラサルモノヲ犧牲ニ供シテ除去シ之レニヨリテ空隙ヲ作
爲シ茲ニ轉位齒ヲ整復スル、少ナカラズ前方齒牙ノ轉位及ヒ顎骨ノ突出ニ於

テ數々行フ處ナリトス

上顎ノ前齒及犬齒ハ其形態特異ニシテ其一個ヲ缺如スルモ直ニ醜惡ナル外貌ヲナス故ニ其一個或ハ數個ノ轉位セルモノアリト雖モ之レヲ拔去スルハ極メテ避クベキ處トス上顎前方齒槽突起ノ前突セル時ニ於テモ亦然リ故ニ此ノ如キ場合ニハ通例外觀ニ罹ルコト少ナキ小臼齒ヲ犠牲ニ供ス殊ニ第一小臼齒ヲ然リトス然リト雖モ第二小臼齒ノ齶蝕ニ罹レルカ或ハ轉位セルキハ之レヲ撰フモ差支ナシ

拔齒ニヨリ齒列ノ一部ニ空隙ヲ生スルキハ其直ニ前方ニ存スル齒牙ヨリ順次ニ後方ニ牽引シテ齒列内ニ容レ遂ニ目的トスル處ノ轉位齒ヲ其固有ノ位置ニ整復シ得ベキナリ

三、齒穹ノ擴大 齒列ノ不整ガ齒穹ノ狹縮ニヨリテ生起セラル、キハ之レヲ擴張シテ正規ノ大サニ達セシメ以テ轉位齒ヲ固有ノ位置ニ容ル、ヲ得前齒ノ叢生及狹縮齒穹ニ於テ最多ク施ス處ナリトス

第二 固定ノ撰擇、Selecting an anchorage.

轉位齒ヲ任意ノ方向ニ移動スルニハ先ツ確固不動ナル固定點ヲ撰ンデ之レ

ヨリ轉位齒ニ牽引力或ハ追進力ヲ加フ然レモ動力ハ必ラズ反動力ヲ伴フモノナルヲ以テ固定點ニシテ確固ナラサルキハ轉位齒ノ移動ニ伴フテ多少轉位齒ノ方向ニ移動セラル、モノタリ故ニ左ノ方法ヲ研究シテ強固ナル固定ヲ作ラサルベカラズ

一、轉位齒ヨリモ植立遙ニ強固ナル齒牙ヲ撰ム 即前齒或ハ犬齒ヲ移動スルニ大臼齒ヲ固定齒トナスガ如シ只轉位齒ノ植立極メテ大ナラサルキニ用ユベキノミ

二、數齒ノ抵抗ヲ連合シテ固定裝置ヲ作ル 數個ノ小臼齒或ハ大臼齒ニ環帶或ハ金帽ヲ相連續シテ作り固定齒トナスハ最安全ナル方法ナリ

三、反動力ヲ中和ス 轉位齒ヲ矯正セントスル力ヲ加フルキハ必ラズ之レガ反動力起リテ固定齒ヲ轉位齒ノ方向ニ牽引セントスベシ故ニ此反動力ヲ中和センガタメ之レト反對ノ方向ニ働ク力ヲ用ユルニアリ

四、齒槽突起或ハ口蓋ノ抵抗ヲ應用ス 蒸和護謨或ハ金屬ヲ以テ口蓋或ハ齒槽突起ノ大部分ヲ被フ矯正板ヲ作り之レヲ固定裝置トナスニアリ口腔内ニ於テ多大ノ容積ヲ占取シ不潔ニ陥リ易キノ弊アリト雖モ頗ル確實ニシテ有用ナ

ル装置ナリ

五、後頭部ノ抵抗ヲ應用ス 數多ノ齒牙ヲ矯正スル時或ハ顯著ナル顎骨ノ突出ヲ矯正スルニ方リテハ口腔内ニ充分ナル固定ヲ得ルヲ能ハズ故ニ特別ナル装置ヲ作為シテ後頭部ニ適合スル帽狀固定装置ト口腔ニ於ケル装置トヲ連絡セシメテ矯正スルヲアリ其應用ノ範圍稍制限セラル、ト雖モ之レヲ適用シ得ル場合ニハ極メテ確實ナル方

法ナリ(第百七圖)

第三 矯正力ノ適用

Application of regulating forces.

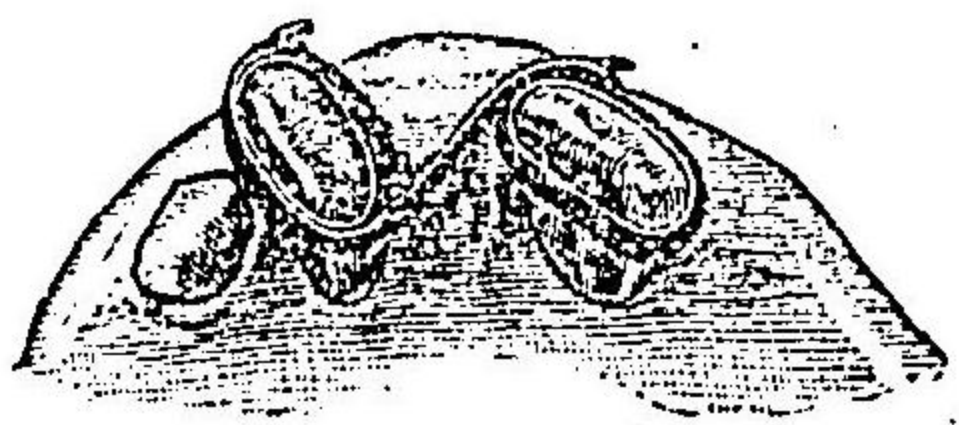
安全ナル固定齒ヲ撰擇スルヲ得タルキハ之レヨリ不整齒ニ矯正力ヲ適用スベシ矯正力トシテ使用セラルベキモノ種々アリ

第百七圖

後頭部抵抗ノ應用



第百八圖
彈性帶

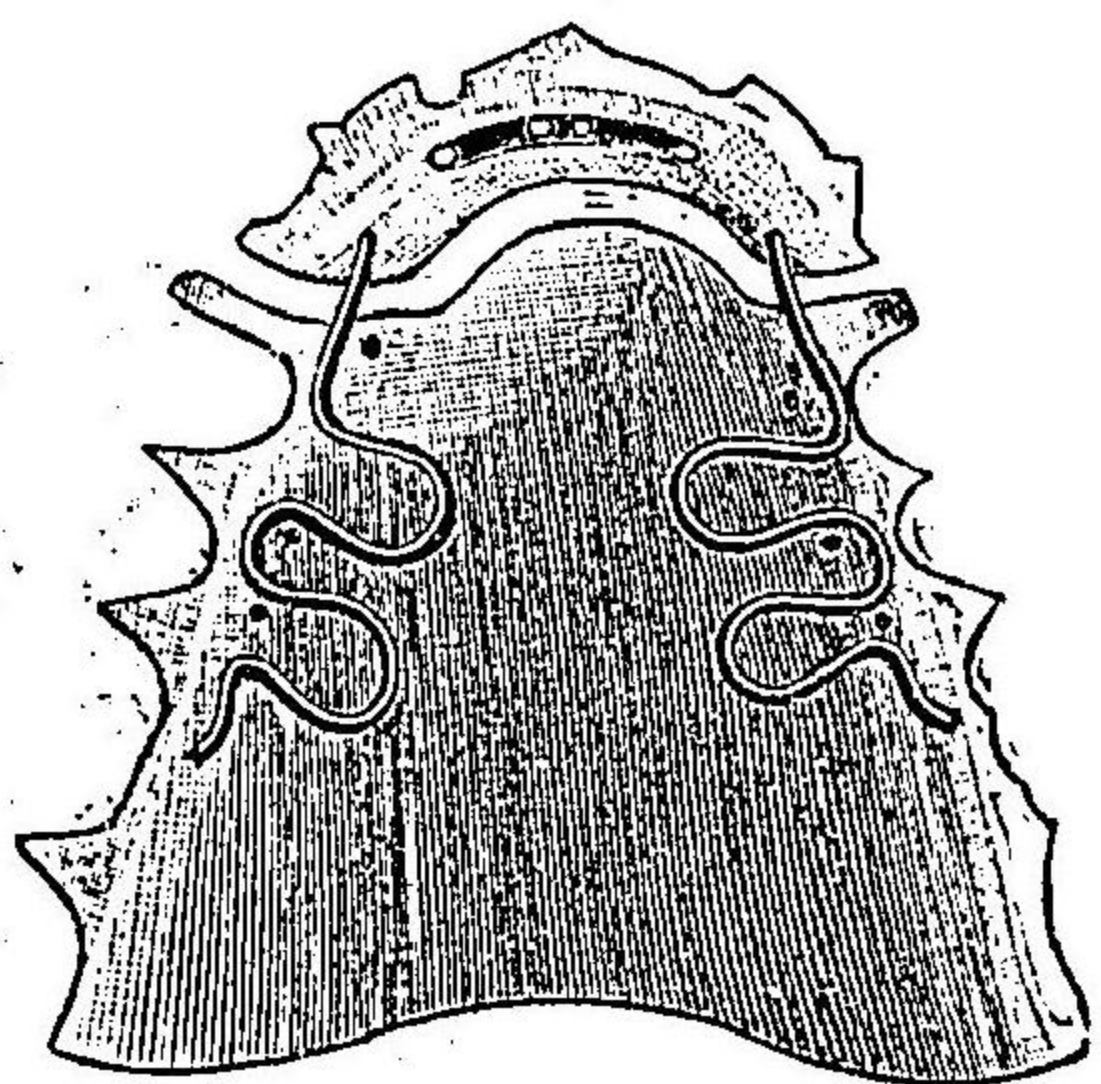


一、彈性帶 彈性帶ヲ緊張シテ固定齒ト不整齒トヲ連結スルキハ其收縮力ニヨリテ轉位齒ヲ牽引スルヲ得護謨管ノ細片、絹糸等之レニ屬ス然レモ此等物質ハ之レヲ直ニ齒冠上ニ適用スルキハ滑脱シテ齒齦縁下ニ潛入スベシ故ニ固定齒及轉位齒ノ兩者ニ各鑲帶ヲ作為シ之レニ鈎或ハ突起ヲ附着シテ之レニ彈性帶ヲ緊留スルヲヨシトス(第百八圖)或ハ口蓋板ニ之レヲ附着スルヲアリ

二、彈鍊 白金加金鍊或ハ琴鍊等ノ如キ彈力アル鍊ヲ任意ニ彎曲シテ其ノ一端ヲ固定齒ニ固着シ他ノ一端ヲ轉位齒ニ附着スルキハ鍊ハ其彈力ニヨリテ眞直ナラント欲シ轉位齒ヲ移動スベシ

ジャクソン氏ハ琴鍊ヲ以テ固定及ビ發動兩裝置ヲ兼攝スルノ方法ヲ案出セリ格狀裝置(即之レニシテ極メテ簡易ナル方法ナリト雖モ之レヲ以テ植立堅固ナル齒牙ニ應用スルヲ能ハズ)コフィン氏ハ彈鍊ノ作用ト口蓋板ノ効用トヲ併用シタリ即W字形ニ彎曲シタル琴鍊ノ彈力ニヨリテ口蓋板ノ兩片ヲ壓開シ矯正スルノ方法ナリ破裂口蓋板

圖九百第
板蓋口裂橫

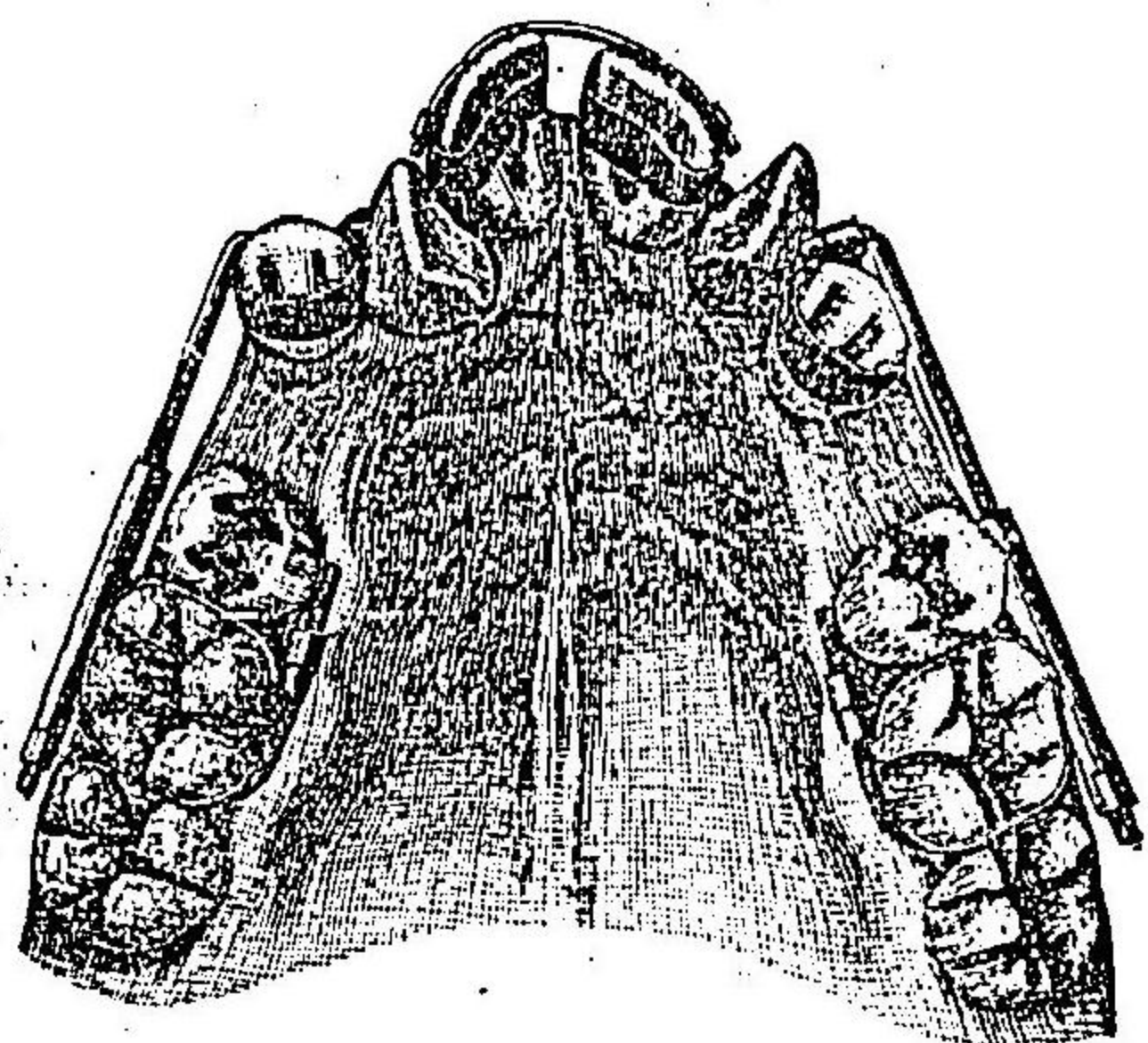


Split-plate 即之レニシテ極メテ有力ナル
裝置ナリト雖モ口腔内ニ於テ多大ノ面
積ヲ占領シ其機能ヲ障害スルコト少ナカ
ラズ(第百九圖)

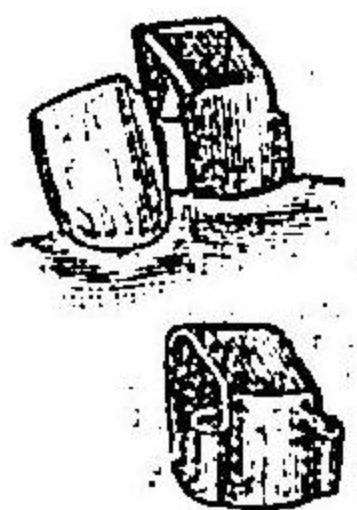
三螺旋 古來最廣ク轉位齒ヲ牽引ス
ルニ使用セラレタルハ護謨其他ノ彈力
帶ナリトス然ルニ千八百七十六年ニド
クトル、フ、アーラー氏ハ說ヲナシテ曰ク

1. 齒牙ヲ矯正スルニ牽引力ハ間歇性ニシテ且一定ノ制限ヲ超ユベカラズ
2. 凡テ彈力護謨裝置ニヨリテ齒牙ヲ移動スル方法ハ非科學的ニシテ疼痛及
炎症ヲ生起シ齒牙ノ將來ヲ危カラシムルガ如キコトアリト雖モ之ヲ矯正スルニ
金屬製裝置ヲ用ヒ雌錠及雄錠ヲ以テ作用セシムルキハ其結果満足ニシテ疼痛
等ヲ發起セシムルコトナシ
3. 齒齦及ヒ齒槽突起ヲ通シテ齒牙ヲ移動スルコト日々朝夕二百四十分ノ一吋
ナルキハ毫モ疼痛等ヲ發起スルコトナシ

圖十百第
置裝旋螺氏ルケンア



圖一十百第
面斜



4. 齒牙ヲ移動スルコト前記ノ制限ヲ超エサルキハ此ニ起ル變化全然生理的ナ
レモ之レヲ超過スレバ即病理的ノモノトナルベシト

之レヨリ以後矯正學上螺旋ノ價值漸
ク重要視セラレタリシガ千八百八十七
年アングル博士ノ更ニ之レヲ稱道シテ
矯正術上ニ一新機軸ヲ出シ所謂アング
ル氏矯正式ナルモノヲ公布スルニ至レ
ルヨリ螺旋ノ聲價數層ヲ加エタリ(第百
十圖)

要スルニ螺旋裝置ハ其發動力確實ニ
シテ而カモ自由ニ之レヲ制御スルヲ得
ベク應用ノ範圍極メテ廣クシテ而カモ
輕易ナルハ實ニ他ノ方法ヲ以テ企テ能
ハサル處ナリ

四斜面 極メテ稀レニ斜面ヲ適用ス

ルコアリ例之他顎ノ齒牙ヲ移動セントスルニ方リ一顎ノ對合齒ニ斜面裝置ヲ附シ咬合毎ニ徐々逐進スルニアリ極メテ稱用スベキ方法ニアラザルナリ(第百

十一圖)

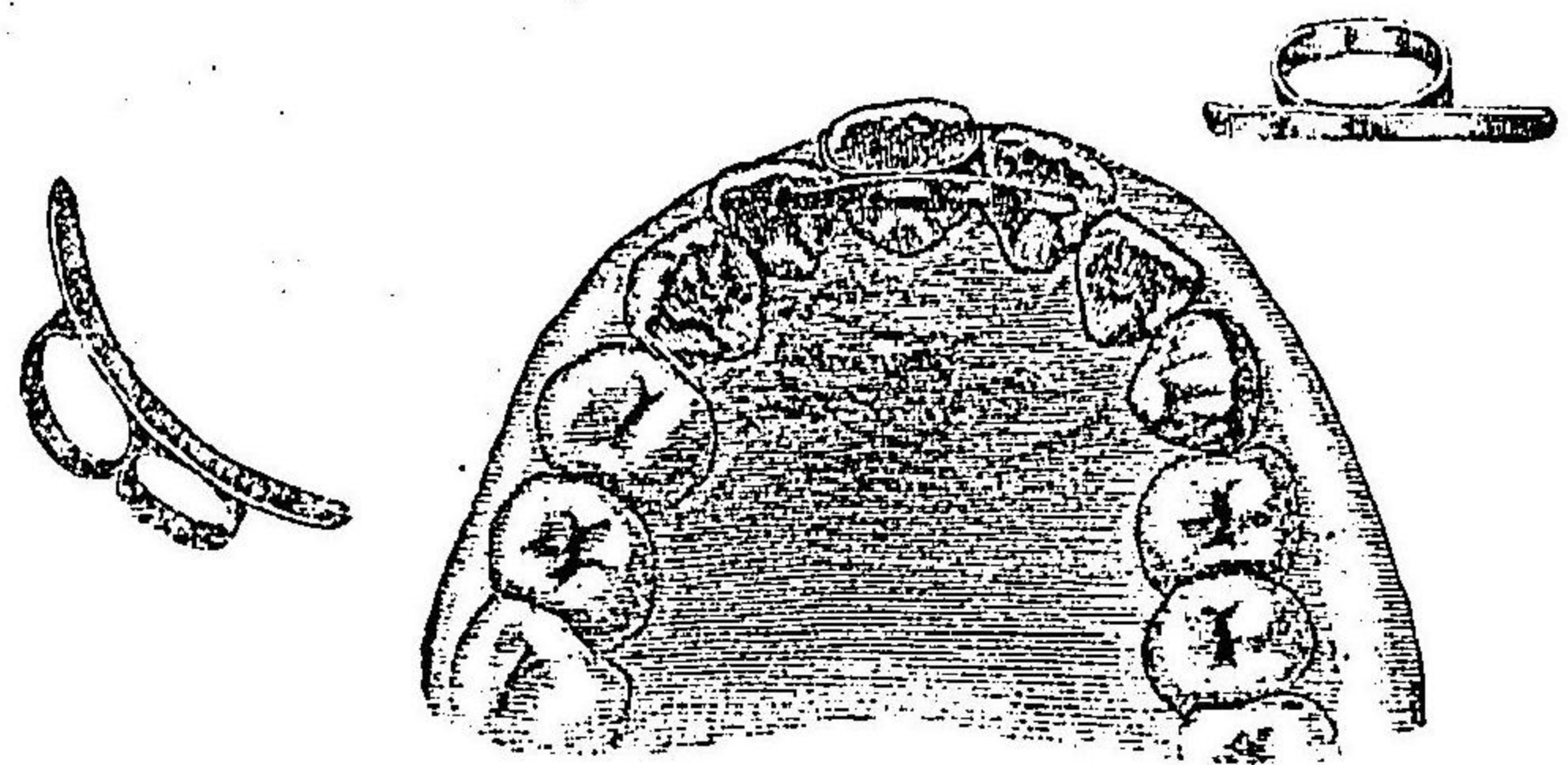
五楔 二齒ノ密接セルモノ、間ニ楔ヲ挿入スレバ抵抗ノ薄弱ナル齒牙ハ移動スベシ又口蓋板ヲ作り其邊緣ト轉位齒トノ間ニ楔ヲ介セシメテ移動スルコアリ現今多ク使用スルモノナシ

第四 整復後ノ固定 Retention after

correction.

矯正力ヲ加エテ移動シタル齒牙ハ弛緩シテ直ニ其用ヲナサズ加之之レヲ放置スルキハ齒頸部ヨリ細菌ノ侵入ヲ招來シ遂ニ脫出スルニ至ルコアルベシ故ニ整復後其全ク固植スルニ至ルマデ之レヲ固定セザルベカラ

第百二十圖 保持裝置



ズ保持法即之レナリ保持ヲスルニ數多ノ方法アリ或ハ外科用結紮糸又ハ銀線ヲ以テ結紮固定シ或ハ口蓋板ヲ作りテ適合スト雖モ共ニ極メテ安全ナラズ連合鑲帶ニ劣ルコ數等ナリ

整復齒及其兩隣齒ニ適合スル鑲帶ヲ作爲シ之レヲ鑲着合一シテセメントニテ齒牙ニ附着スルニアリ堅固ニシテ輕便ナルコ他ニ比類ナシ(第百十二圖)

保持裝置ヲ着用セシムル時日ハ體質ト不整ノ形態トニヨリテ相同ジカラズト雖モ最單純ナルモノニシテ三ヶ月以上數齒ヲ移動シタルモノハ一年以上固定ヲ持續セザルベカラズ

第四節 矯正ニ伴フ組織的變化

齒牙ノ移動ニ際シテ周圍ノ組織ニ起ル變化ハ概テ一ニシテ即一齒ニ矯正力ヲ加フルヤ前側ニ於ケル齒膜ハ齒槽突起ニ壓迫セラレテ血液ノ供給減少シ神經ハ初メ壓迫セラレテ多少不快感乃至疼痛ヲ生起スト雖モ乃チニシテ半バ麻痺ニ陷ル此等ノ營養的狀態ノ變動ニヨリ破骨細胞漸ク其働キヲ初メテ前方ニ横ハル處ノ齒槽突起ノ吸收ヲ生ズ

之レニ反シ齒牙ノ移動シタル後方ニアリテハ齒膜ハ初メ先ツ壓迫ノ減少ニヨリテ彈性組織漸ク弛緩シ血流増加シテ營養機旺盛トナリ造骨細胞ノ活動ニヨリテ新生骨質ヲ沈着ス然レモ骨質ノ沈着ハ前面ニ於ケル吸收ト相併行スル能ハザルヲ以テ整復後暫時ヲ經ザレバ固植シ能ハザルモノトス

骨質ノ吸收ハ齒槽板ノ厚薄ニヨリテ大小アリ上顎前齒ハ前方ニ移動スルハ極メテ容易ナリト雖モ之レヲ後方ニ移動スルハ抵抗頗ル大ナリ抵抗ノ最小ナルハ齒槽中隔ニシテ其海綿樣質ヨリナルニ基ク

其他相並列セル數齒ハ一時ニ同一方向ニ移動スルキハ齒槽板ハ其彈性ニヨリテ甚ダ速ニ移動スルヲ見ルベシ又々上顎齒穹ヲ擴張スルニ際シテハ正中線ニ於ケル縫合ノ分離ヲ隨伴スルヲアリ

第五節 各種不整ノ矯正術式

(一) 轉位齒ノ矯正法

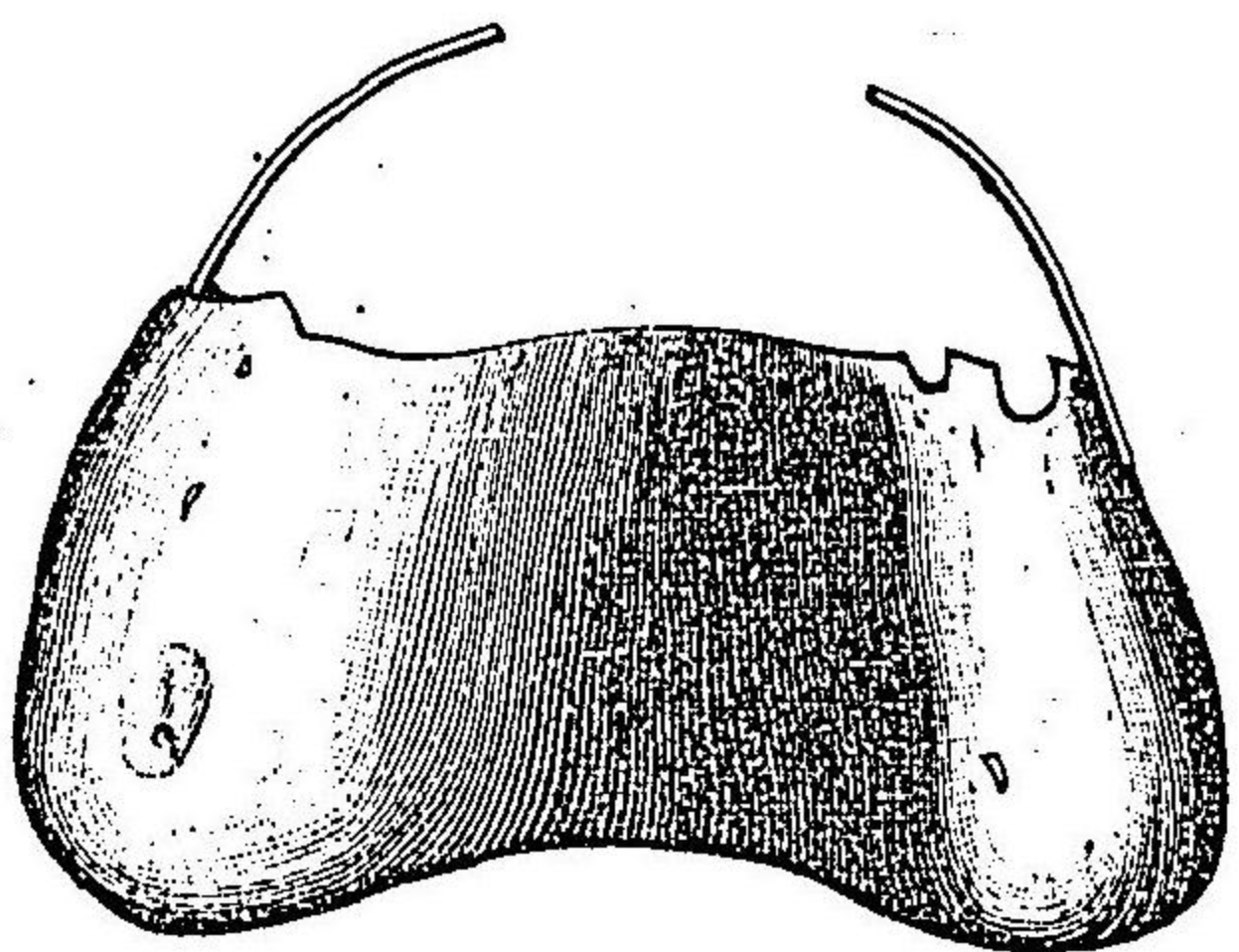
一二齒ノ轉位ハ前齒部ニ顯ハル、極メテ多クシテ遺傳乳齒ノ拔去不當或ハ顎骨ト齒牙ノ不調和ナルニ歸ス上顎犬齒ノ外轉同側切齒ノ後轉同中切齒ノ

前轉及ビ下顎切齒ノ叢生ハ普通見ル處ノ形態ナリ小臼齒及大白齒ノ轉位ハ齒穹異常ノ條下ニ述ブ

前方轉位齒ノ矯正

一、コフィン氏法 齒列内ニ相應ノ空隙ヲ作爲シタルノ後口蓋ニ適合スル蒸和護謨床ヲ作り其蒸和ノ際適宜ノ部ニ鈎或ハ環ヲ附着シ置クヲ要ス此緊留部ヨリ轉位齒ニ護謨環ヲ緊張スレハ徐々ニ之レヲ牽引スルヲ得ベシ

第三百十三圖
コフィン氏法



二、或ハ口蓋板ヲ小臼齒及ヒ大白齒咀嚼面ヲ超エテ頰部ニ達セシメ其前方ニ琴線ヲ埋沒蒸和スルモヨシ琴線ハ前轉齒ヲ唇面ヨリ壓迫シテ徐々ニ整復スルヲ得但シ琴線ノ彈力ハ其彎曲度ヲ増加スルニヨリテ增強セラレベシ(第百十三圖)

三、下顎前齒ノ全部ガ前方ニ突出セル片ハ金或ハ蒸和護謨ヲ以テ床板ヲ調製シ其前方

圖 四 十 百 第

法 氏 ル ギ ー マ

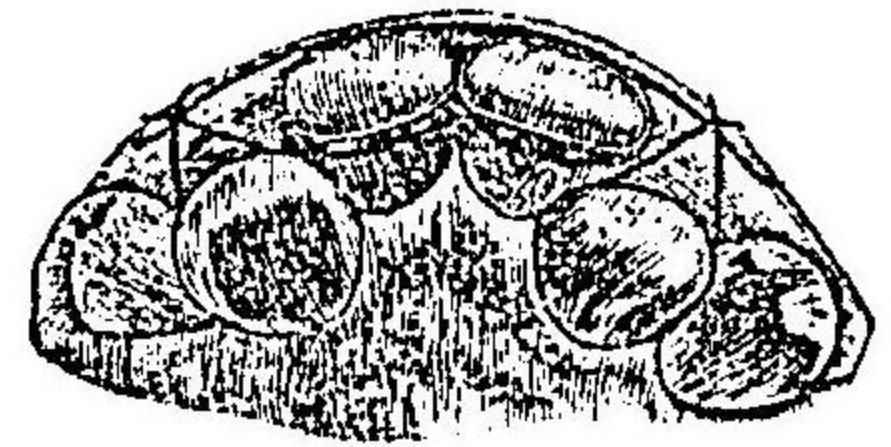
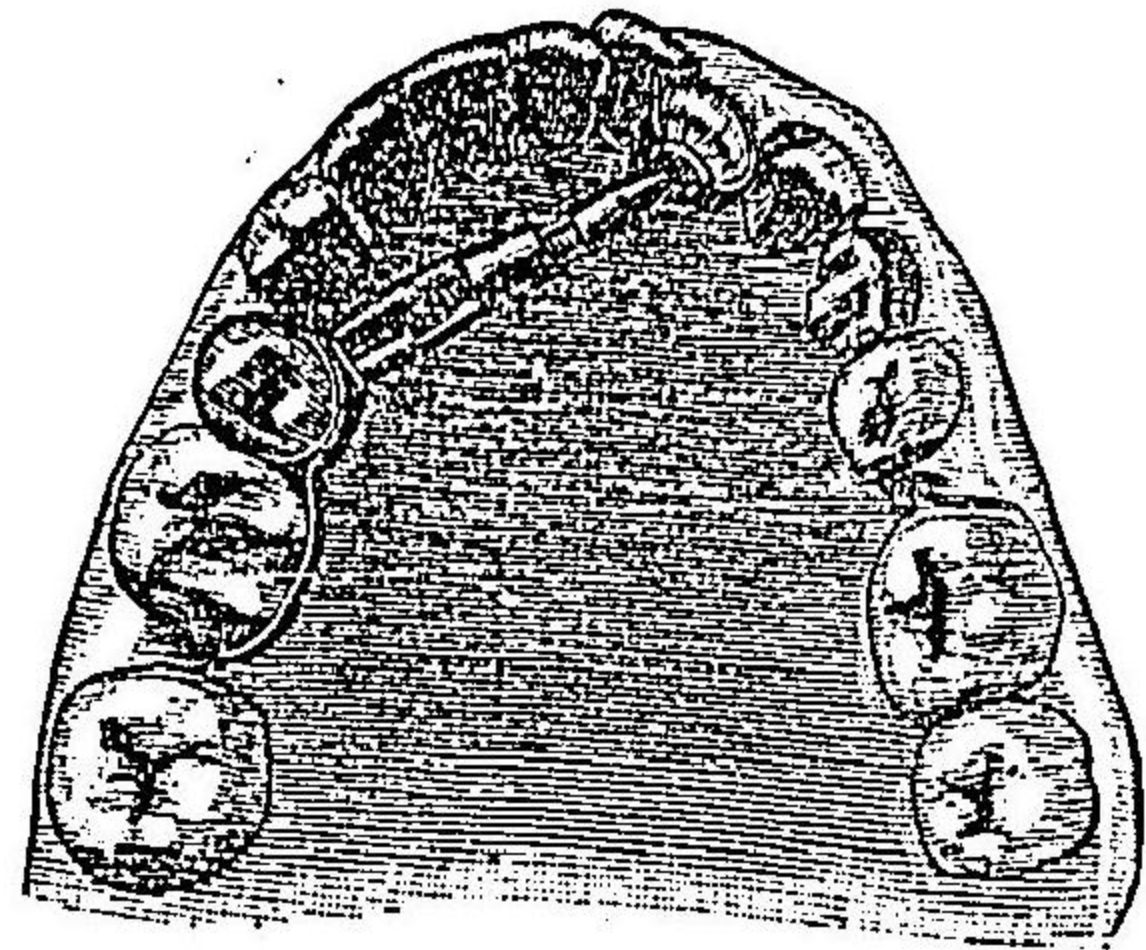


圖 五 十 百 第

法 氏 ル グ ン フ

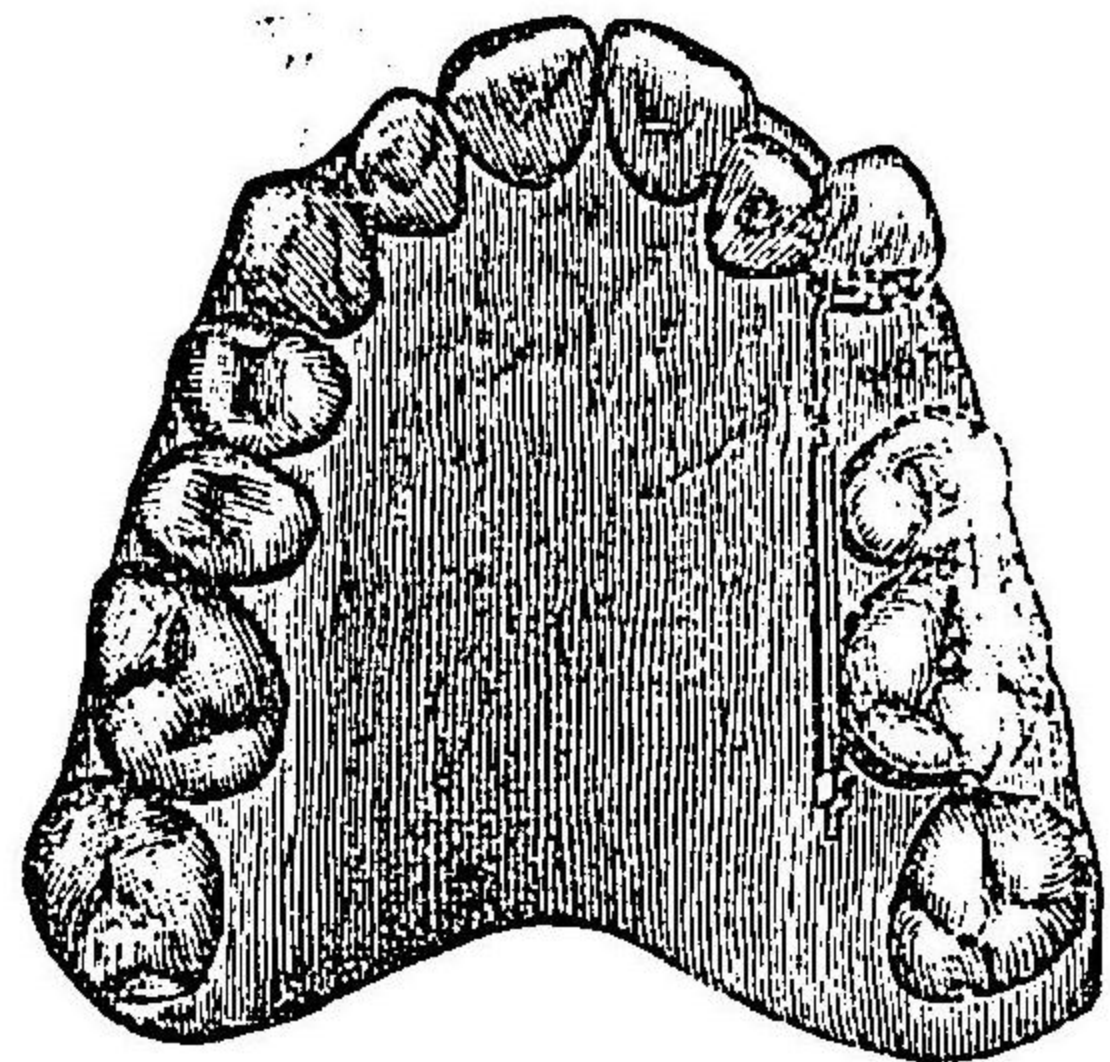


ニ於ケル繫留部ヨリ各齒ニ護謨帶或ハ結紮糸ヲ緊張スベシ
後方轉位齒ハ矯正

一、マーギル氏法 上顎兩側切齒ノ後方ニ轉位セルモノアリタルキハ兩中切齒ヲ固定齒トシテ各環帶ヲ作り之レヲ鐵着合一シ且前面ニ彈力性アル金屬例之白金加金或ハ琴線ヲ横ニ鐵着シ其兩端ヲ轉位齒ノ前面ニ停止セシム之レヲセメントニテ合着シ線ノ兩端ヨリ轉位齒ニ護謨帶ヲ緊張スルカ或ハ絹糸ヲ以テ結紮スルキハ之レヲ前方ニ牽引スルヲ得ベシ(第百十四圖)

二、アングル氏法 側切齒或ハ中切齒ノ後方ニ轉位セルモノヲ氏ハ次ノ如クシテ矯正シタリ即チ轉位齒ニ白金製環帶ヲ作り其口

第百十六圖
アングラ氏法



蓋面ニハ稍厚キ白金鍍ノ小片ヲ鑲着附加シテ堅固ニナシ且其實質ヲ通シテ一
小孔ヲ穿ツ固定齒トシテ反對側ノ第二小臼齒及第一大臼齒ヲ撰ビ之レニ連續
シテ白金製鑲帶ヲ作り且其一部ニ白金鍍ノ一小片ヲ鑲着シテ増厚シ其部ニ小
溝ヲ穿ツ(第百十五圖)

兩鑲帶ヲセメントニテ合着シ其間ニ壓開螺旋ヲ適合シ日々之レヲ少許宛旋
退スルトキハ徐々ニ之レヲ壓出スルヲ得ベシ

轉位犬齒ノ矯正

一、アングラ氏法 同側ノ第一臼齒ヲ固
定齒トシ之レニ鑲帶ヲ適合シ鑲帶ノ口蓋
側ニ長キ直管ヲ鑲着シテ牽引螺旋ノ後端
ヲ容ル、ニ供シ轉位犬齒ニモ亦鑲帶ヲ作
リ其遠心面ニ近ク短管ヲ水平ニ鑲着シ牽
引螺旋ノ曲端ヲ受容スルニ適セシム之レ
ヲセメントニテ合着シ各管ニ牽引螺旋ヲ
通過シ直管ノ後端ニ雌錠ヲ置キ日々之レ

ヲ旋轉シテ犬齒ヲ牽引スルニアリ(第百十六圖)

二、マターソン氏法 兩隣齒ヲ壓開シテ空隙ヲ作りツ、犬齒ヲ矯正スルニ適

ス先ツ可撓性金屬帶ノ狹小ナルモノニケヲ取り

其内端ニハ各短管ヲ縱ニ鐵着シ外端ニハ一帶ニ

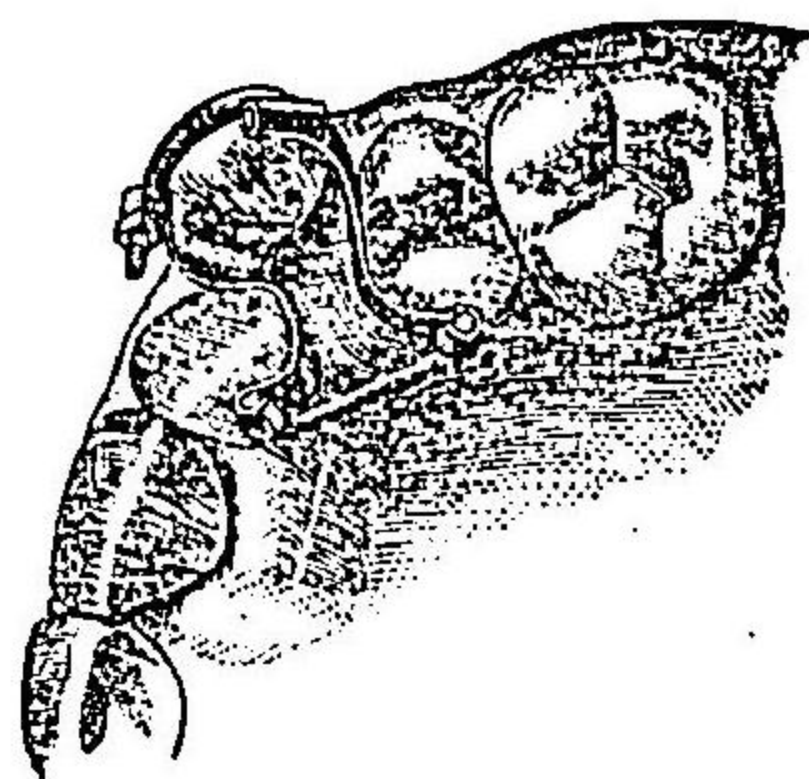
ハ縦ニ他帶ニハ横ニ短管ヲ鐵着シタルノ後内端

ニ直桿ヲ外端ニハ螺旋桿ヲ適合シ螺旋ヲ徐々ニ

回旋スルニアリ(第百十七圖)

(二)捻轉齒ノ矯正法

圖七十百第
法氏ンソタマ



齒牙ガ其中軸ニ沿フテ回轉スルハ圓錐形單根ヲ有スルモノニ最多シ切齒及
ヒ犬齒ノ如キ之レナリ就中切齒ハ其齒冠部比較的廣大ナル楔狀ヲナセルヲ以
テ其邊緣ニ加ハル僅微ノ抵抗モ容易ニ之レヲ生起スルモノナリ齒穹内ニ空隙
ノ缺乏、齒槽中隔ノ不正肥大隣齒ノ不正位置等ノ如シ然レモ又其遺傳タルナ
ナカラズ

一、ギルフォード氏法 二ケノ相隣在セル齒牙同方向ニ捻轉セルキハ先各々ニ

銀帶ヲ作り其一部ニ各鈎ヲ附シ鈎ヨリ鈎ニ護膜帶ヲ緊張スルヲ第百八圖ノ如

シ

二、アングル氏法 二齒相對シテ各外方ニ回轉セルモノアルキハ其各ニ銀帶

ヲ作り銀帶ノ唇面遠心角ニ近ク各短管ヲ水平ニ鐵着

シ之レヲセメントニテ齒牙ニ合着シテ管ヨリ管ニ彈

力アル琴線ヲ挿入スルニアリ(第百十八圖)

三、シグフリード氏法 吾人ガ日常使用スル紙挾ミ

或ハ婦人ガ用ユル蝶形襟止メニ於テ目撃スル發條ノ

原理ヲ齒牙矯正術ニ應用スルヲ得ベシ

圖ノ如ク各捻轉齒ニ銀帶ヲ適合シ其遠心部ニ近ク

縮狀緊留部ヲ附着シ之レニ發條ノ兩翼ヲ受容セシム

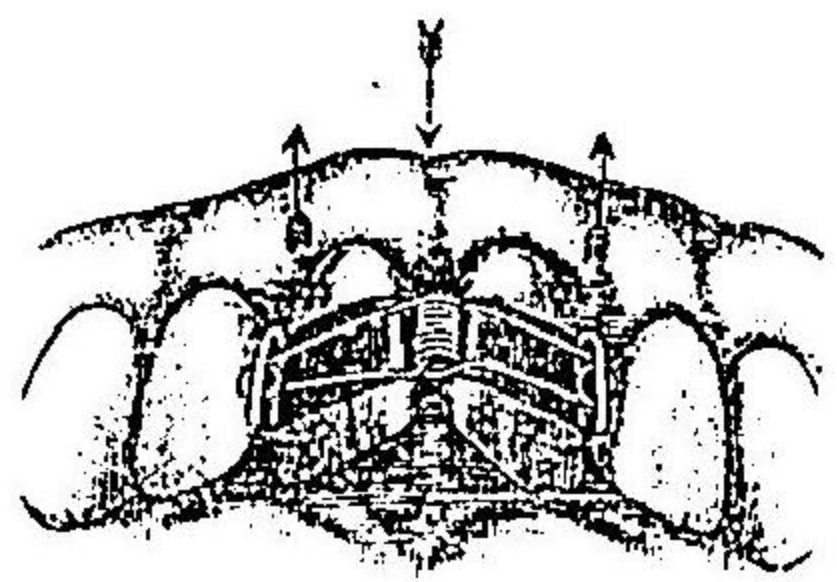
ルニアリ(第百十九圖)

(三)齒長異常ノ矯正

短縮齒ハ之レヲ牽出シ延長齒ハ之レヲ押入ス咬合

ノ缺如セルモノハ其狀態ニ應シテ適宜此二法ノ一ヲ施シ或ハ之レヲ併用ス
押入法 Intrusion 齒牙ノ延長若シ齒膜ノ慢性炎ニ歸スルキハ徐々ニ消炎療法

圖九十百第
法氏ドーリフグシ

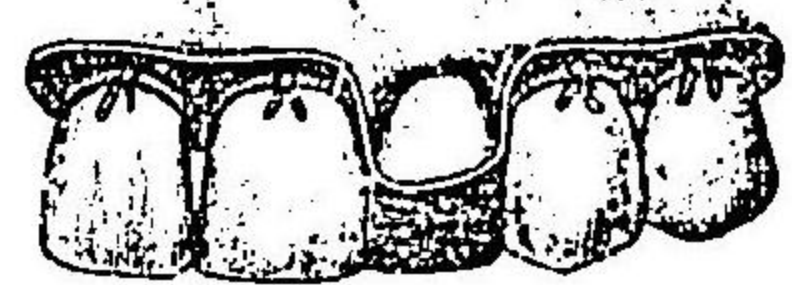


圖八十百第
法氏ルグンア



圖 十二百 第

法氏トスブルヘ



ヲ施シテ且安靜ノ位置ニ之レヲ置キテ矯正スルヲ得ベシ

一、ヘルブスト氏法 防濕護謨ノ小片ヲ延長齒截端ヲ超エテ兩隣齒ニ設置シ結紮スルノ方法ニシテ抵抗ノ多大ナラザル前齒等ニ使用スベキノミ(第百二十圖)

二、ゴダード氏法 兩隣齒ニ鑲帶ヲ適合シ其唇舌兩面ニ於テ一鑲帶ヨリ他鑲帶ニ亘リテ各橫桿ヲ鑲着シ一桿ノ中央ヨリ延長齒ヲ超エテ他桿ニ護謨環ヲ緊張スルモノニシテ簡易ノ一法タルヲ失ハズ(第百二十一圖)

牽出法 Extension 短縮齒若シ單ニ兩隣齒ノ傾斜ニヨリテ萌出路ヲ失ヒタルニ基クハ只隣齒ヲ壓開スレバ足レリトス

一、ゴダード氏法 兩隣齒ニ各一部金帽ヲ作り其

圖 一十二百 第

法氏ドーダゴ

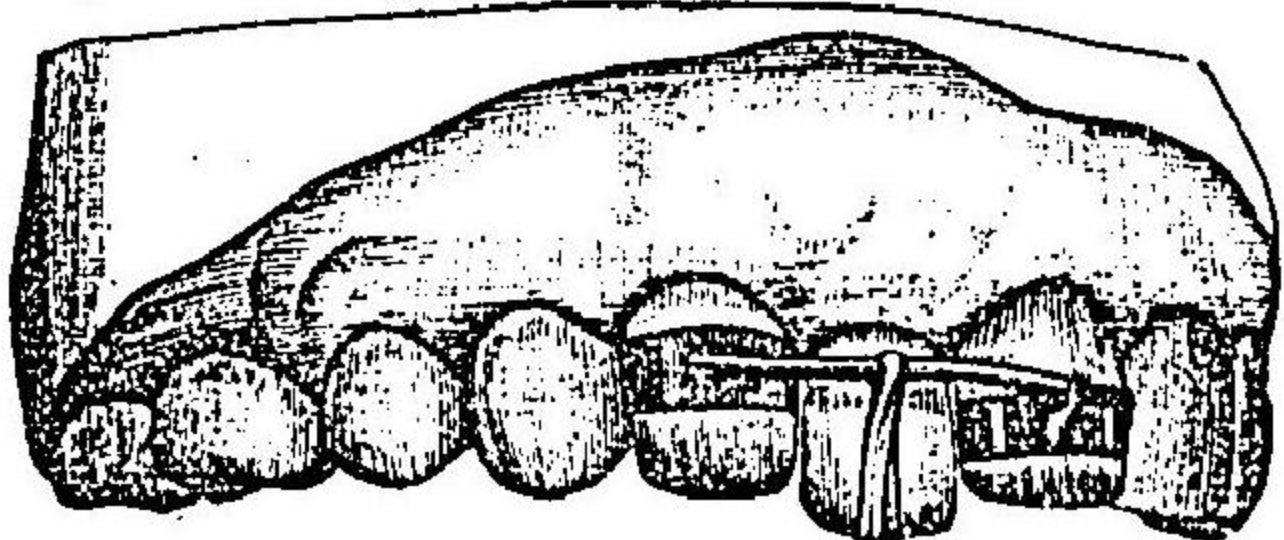
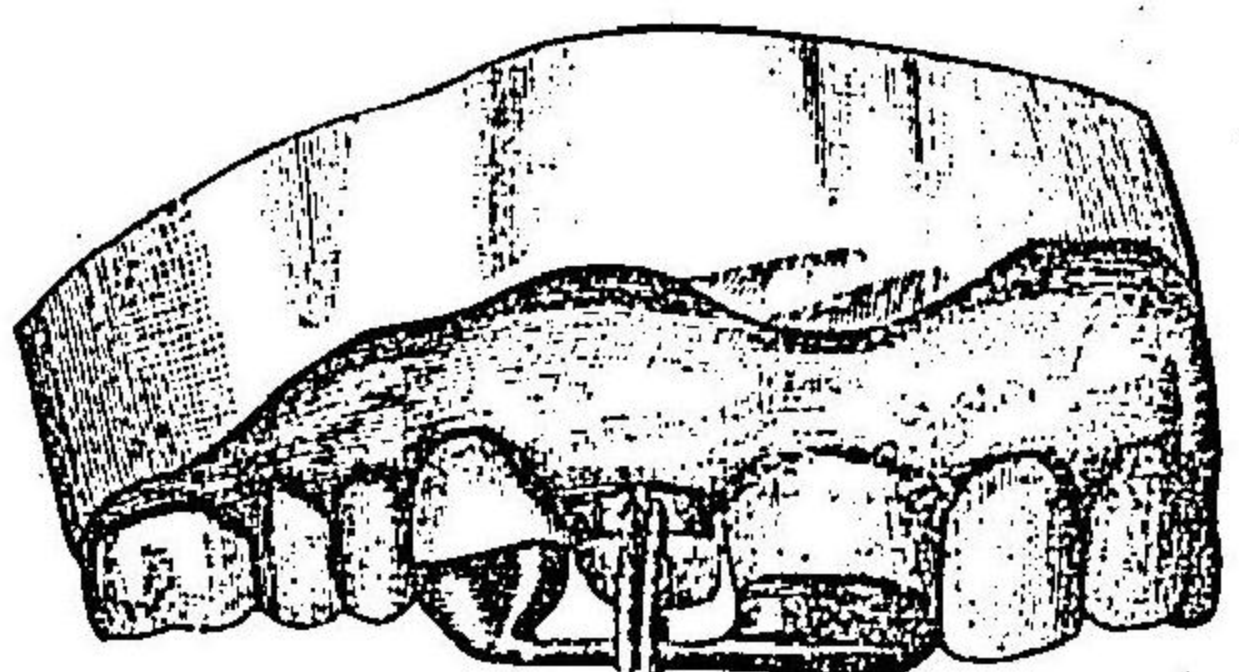


圖 二十二百 第

置 裝 出 牽



上面ニ橫桿ヲ鑲着シ桿ノ中央ヲ超エテ短縮齒ニ合着シタル鑲帶ノ繫留部ニ護謨環ヲ緊張スル方法ナリ(第百二十二圖)

二、強制的萌出法 萌出路ニ於ケル障害或ハ萌生機ノ停止等ノタメニ生シタル僅微ノ短縮齒ニアリテハ適宜ノ形狀ヲナセル鉗子ヲ以テ徐々ニ之ヲ齒槽窩ヨリ牽出シ適當ナル位置ニ固定スルヲ得ベシ

咬合矯正法 咬合ノ缺如若シ後方ニ於ケル一二齒ノ延長ニヨリテ生シタルキハ其延長齒ノ咀嚼面ヲ刮去スルガ或ハ之レヲ拔去シテ矯正スルヲナキニアラズ

一、ダーベンボート氏法 氏ハ橋狀裝置ヲ用ヒテ咬合缺如セル兩側ノ第一大臼齒及ヒ二ケノ小臼齒ヲ高舉シタリ裝置ハ兩側最後ノ大白齒ト前齒トニ適合セル金帽ト此ノ凡テヲ連絡スル橋トヨリナルモノニシテ橋下ニ存在セル短縮齒ヲ彈性帶ニテ橋ニ結紮スル方法ナリ(第百二十三圖)

二、ケース氏法 兩側ノ最後ノ大白齒ヲ固定齒トシテ之レニ鑲帶ヲ作り其頰

圖 三 十 二 百 第

法 氏 ト - ホ ン ベ - ー ダ

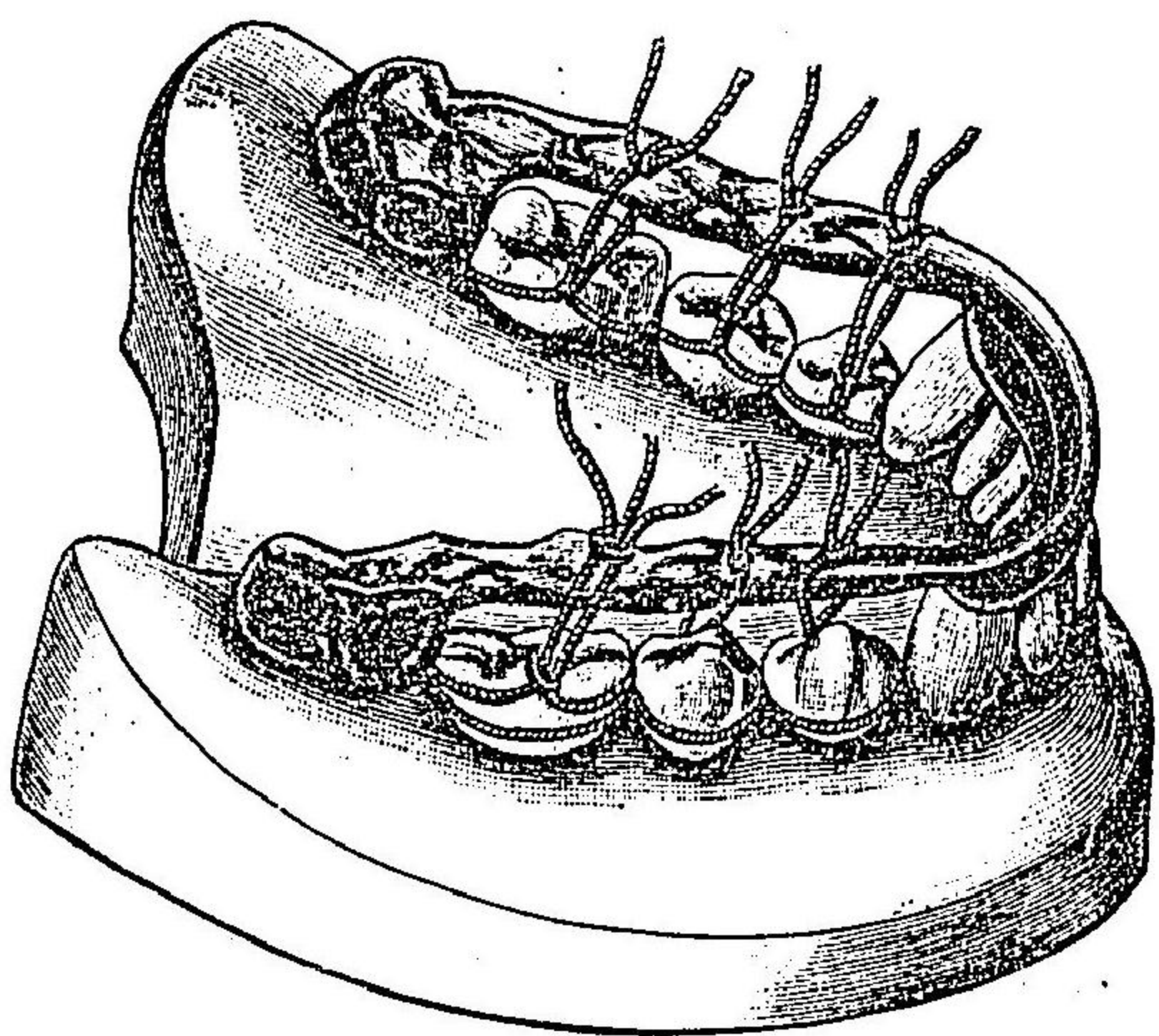
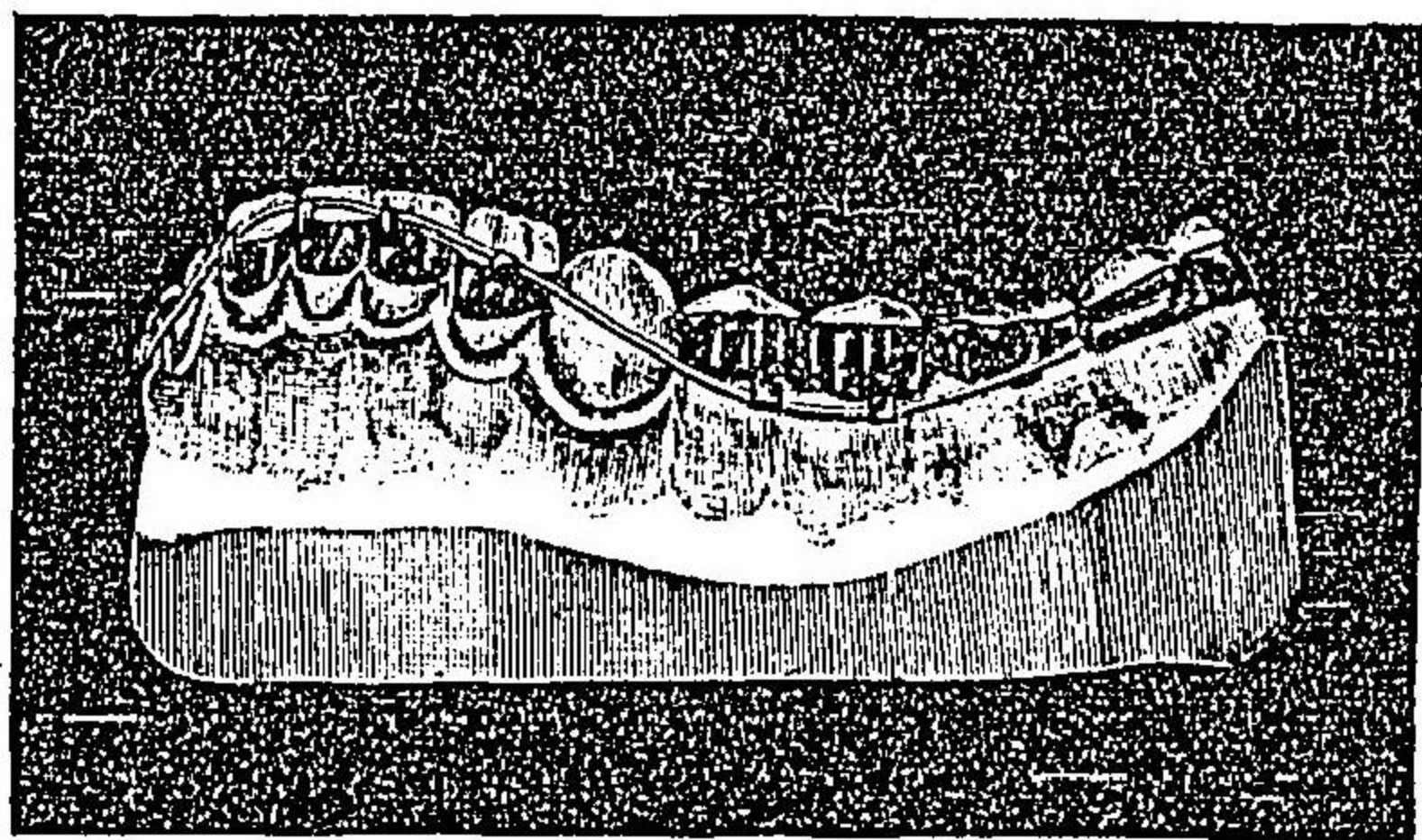


圖 四 十 二 百 第

置 裝 氏 ス - ー ケ



側ニ各一ケノ短管ヲ鑲着ス短縮セル兩側ノ大白齒及小白齒ニハ各鑲帶ヲ適合シテ其頰面ニ各鈎ヲ齒根ニ向ケテ鑲着シ延長セル前齒ニモ各鑲帶ヲ作り其唇面ニハ截端ニ向ヘル鈎ヲ鑲着ス此等ノ鑲帶ヲ悉クセメントニテ合着シタル後彈力ニ富メルピアノ鍊ヲ各齒鑲帶ノ鈎ニ適合シテ裝置シ兩端ヲ固定齒鑲帶ノ

短管中ニ挿入スルノ方法ナリ琴鍊ノ彈力ハヨク牽出押入ヲ一時ニ營爲スルヲ得ベシ(第百二十四圖)

(四) 齒穹異常ハ矯正

齒穹ガ不規則ナル狹縮ヲ呈スルコトハ上顎ニ於テ極メテ稀有ナラザルモノニシテ殊ニ小白齒部ニ於テ其狹縮顯著ナルヲ見ル然リト雖モ上顎前齒部及下顎ニ於テ之レヲ目撃スルコトナキニアラズ

一、コフィン氏法 口蓋ニ適合スル口蓋板ヲ調製シ其中央ヲ縱斷シテ茲ニ彈鍊ヲ彎曲シタルモノヲ附着シ其彈力ニヨリテ齒穹ヲ擴大スルノ方法ナリ

二、同一原理ヲ以テ下顎ノ齒穹狹縮ヲモ矯正シ得ベシ矯正力ハ彈鍊ヲ任意ニ彎曲シテ増減セシムルヲ得

三、タルボット氏法 狹縮部ニ相當スルニケノ護謨片ニ琴鍊ヲ縮狀ニ彎曲シタルモノヲ結紮シタルモノニシテ任意ニ除去清掃シ得ベシ

四、ゴダード氏法 上顎前齒部ニ於ケル齒穹ノ狹縮ヲ矯正スルニ適スル口蓋板ヲ犬齒部ニ於テ橫斷シ前後兩片ノ間ニW字形彈鍊ヲ働カシムル方法ナリWノ彎曲ヲ左右スレバ矯正力ヲ増減シ得ベキナリ(第百九圖ヲ見ヨ)

(五) 顎骨突出ノ矯正法

最普通ナルハ上顎前齒部齒槽突起ノ突出ニシテ下顎前齒部之レニ次グ或ハ兩者併發スルヲアリ黒奴口即之レナリ或ハ下顎骨ノ前後徑異常ニ大ニシテ頤部ノ著シク突出スルヲアリ

一、ギルフォード氏法 蒸和護膜ヲ以テ口蓋板ヲ製シ其中央ニ環或ハ鈎ヲ附シ之レヨリ各突出齒ニ彈性護膜環ヲ緊張スルキハ簡易ナル矯正器ヲ得ベシ護膜

環若シ齒頸部ニ於テ滑脱シ齒齲ヲ毀傷スルノ患アルキハ齒牙ニ鑲帶ヲ合着シ鑲帶ニ環或ハ鈎等ノ緊留部ヲ鑲着シ置クベシ

二、アングル氏法 兩側二個ノ大白齒ヲ固定齒トシテ鑲

帶ヲ適合シ其頰側ニ短管ヲ鑲着ス之レヲセメントニテ合着シタルノ後兼テ齒穹前面ニ適合シテ成形シ置キタル琴線ヲ取り其兩端ニ雄銚ヲ刻ミ之レヲ各短管ニ挿入シ其後端ノ各側ニ於テ雌銚ヲ働カシムルキハ前方ニ於ケル突出齒ハ徐徐ニ後退セラレベシ

第百二十五圖

附 着 裝 置



第百二十六圖

ゴダード氏口外矯正裝置



三、ゴダード氏上顎後退法 上顎骨ノ前突顯著ナルキハ其移動ニ大ナル力ヲ要シ後方ノ齒牙ノ抵抗ノミヲ以テ充分ナラザルヲアリ此ノ如キキハ後頭部ニ於ケル抵抗ヲ應用スルヲ常トス

氏ハ顯著ナル前突ニ方リ第百二十五圖ノ如ク前齒唇面全體ニ適合スル護膜

片ヲ作り之レニ兩側口角外ニ突出スベキ彈力線ヲ埋没シ之レヲ齒牙ニ適合シテ兩側ノ鈎狀端ヲ後頭部ニ於ケル矯正帽ニ彈力帶ヲ以テ附着シタリ第百二十六圖ハ其ノ着用セル狀態ヲ示ス

四、ジャクソン氏下顎後退法

下顎骨殊ニ頤部ノ前突顯著ナルキハ口腔ヨリ充分ナル矯正力ヲ附與シ能ハサルヲアリ殊

第百二十七圖
法氏ソクヤツ



ニ其不正ガ下顎骨隅角或ハ關節窩ニ於ケル變化ニ歸スルトキニ於テ然リトス此ノ如キ場合ニモ亦後頭部ノ抵抗ヲ應用ス

對合齒トノ關節狀態ニヨリ口腔ヲ適當ニ所置シタルノ後頤部ニ適合スル革製或ハアルミニウム製杯狀板即頤蓋ヲ作リ之レニ兩側ヨリ突出スル彈簧ヲ附着シ其ノ鍊ノ鈞狀端ヲ

各側ニ於テ矯正帽ノ繫留部ニ彈力帶ヲ以テ連絡セシムル方法ナリ(第百二十七圖)

(六) 外科的齒列矯正法

普通行ハル、齒列矯正法ハ齒牙ノ移動ヲ一ニ破骨細胞ノ作用ニ待ツモノナ

ルヲ以テ極メテ緩慢ニシテ其間疼痛化膿等ノ種々ナル煩勞ヲ生起スルコトナキニアラズ故ニ少シク外力ヲ適用シテ齒牙ノ移動ヲ即時ニ企ツルコト時トシテ却テ有益ナルコトアリ之レヲ即時矯正法或ハ其多少外科的方法ヲ要スルニヨリ外科的矯正法ト云フ數十年前以前ヨリ行ハレタル處ナリ

一、トームス氏法 初メテ外科的齒列矯正法ノ記錄ヲ遺シタル人ニシテ圓錐形單根ヲ有スルモノニ好シテ之レヲ應用シタリ其法先ツ齒頸部ニ適合スル拔牙鉗子ヲ撰擇シ靜ニ齒牙ヲ鉗取シ先ツ之レヲ前後ニ移動シ次テ少シク回轉運動ヲ施シツ、齒牙ヲ徐々ニ正位ニ向ハシムルニアリ整復後ハ絹糸或ハ銀鍊ヲ以テ兩隣齒ニ結紮シ或ハ兼テ調製シ置キタル鐵帶ヲ以テ隣齒ニ固定スレバ其効果更ニヨシ

二、タルボット氏法 氏ハ普通ノ器械的齒列矯正法ヲ施スニ方リ齒牙ノ移動ヲ迅速ナラシメンカタメニ齒牙ヲ移動セントスル方向ニ横ハレル齒槽突起ノ一部分ヲ楔狀ニ切除スルコトヲ説明セリ切除ニハ鑿或ハバーヲ使用シタリ

三、アングル氏顎骨切除法 下顎骨ノ前突極メテ大ニシテ他ノ方法ヲ以テ矯正シ能ハサルモノニ氏ハ下顎兩側ノ小白齒部ニ於テ顎骨ノV字形小片ヲ切除

シタル後普通ノ下顎骨折ヲ處置スル方法ニヨリ齒間副木ヲ適用シテ効果ヲ收メタルコアリ蓋シ稀有ニ施スベキ方法ナリ

齒科學通論 前篇終

明治四十年三月廿六日印刷
明治四十年三月廿九日發行

正價金貳圓八拾錢

著者

佐藤 運 雄
本郷區綱生町二番地はの三十三號

印刷者

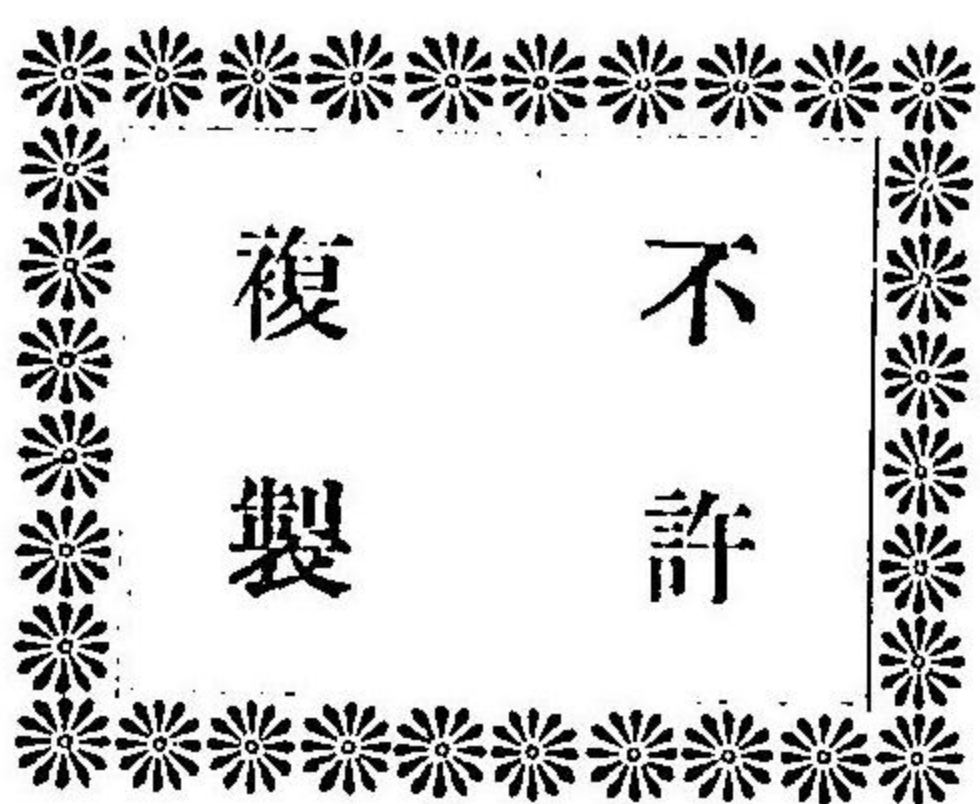
中村 政 雄
麴町區右樂町二丁目一番地

印刷所

報文社
右 全 所

發行所

齒科學報社
神田區三崎町二丁目九番地



不許複製

賣 捌 所

神田區三崎町二丁目九番地
本郷區湯島切通坂町八番地
日本橋區本町三丁目二十番地

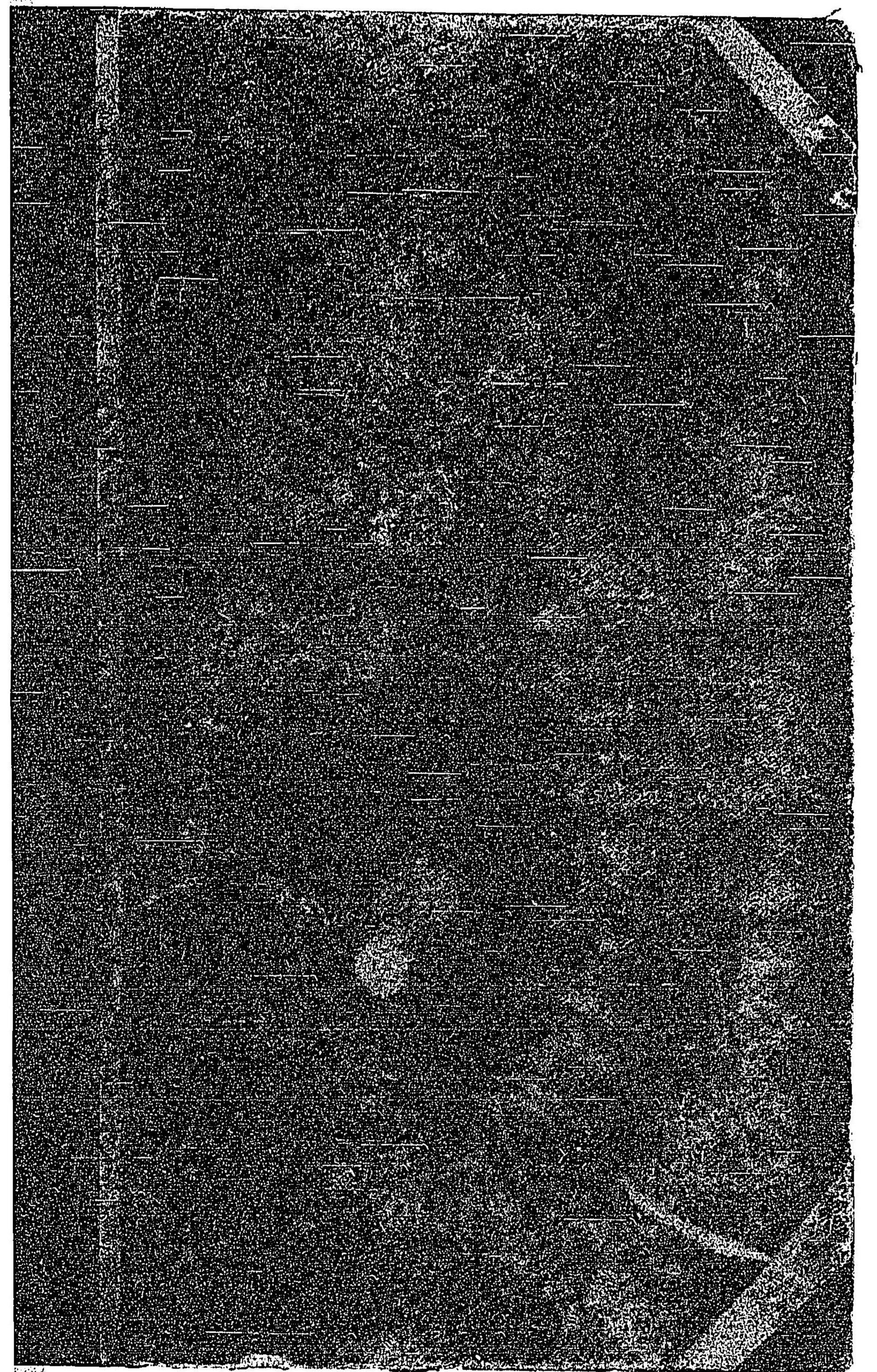
齒科學報社
南江 瑞穂 堂

8.6.1

32

18
別座
2/1

137-8



58
別冊
24

M

060191-001-1

58-24

齒科学通論

佐藤 運雄 / 著

前

M40

CBL-0020



